

第4章 興道寺廃寺の遺構

第1節 興道寺廃寺の伽藍域

第1項 金堂基壇の様相

A. 金堂基壇の調査概要（第83～86図）

金堂基壇の調査に該当する調査箇所は第2次調査1トレンチ、第6次調査2・3トレンチ、第7次調査4・5トレンチ、第10次調査4～6トレンチ、第11次調査5・6トレンチ、第12次6・7トレンチ、第13次調査2トレンチである。現在の微地形にも表れているように基壇の南側は後世に大きく削平されている。

『2007年報告』で基壇遺構2として示した段階では第6・7次調査で基壇の東西辺の一部が調査されたに過ぎず、また複数時期の基壇の重複を全く想定していなかったため、南北20.7m前後、東西17.8mの平面規模で、東面する金堂基壇を想定した。しかし、『2007年報告』前年の平成18年2月開催のシンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」では調査担当者が南面金堂であった可能性もあることを指摘したように、この段階の調査では基壇の様相を明確に把握しがたい状況であった。第1期調査では、掘込地業、基壇積み土の版築、石積みを伴う基壇外装といったように、新旧の金堂基壇の様相を混在する形で検出している。

第13次調査までの第2期調査では、金堂基壇を面的に調査する機会に恵まれ、第10次調査4～6トレンチでは2時期の基壇が南北軸を違えながら南北に重複する様相を把握し、第11次調査5トレンチでは2時期の基壇が南北に重複する様相を平面で確認したことで、言わば創建期、再建期とも言える新旧の基壇の存在が明らかとなった。第1期調査で南北に長い基壇が想定されたのは基壇が南北に重複する状況をひとつの基壇として捉えたためでもあった。第11次調査6トレンチでは再建期金堂基壇の西辺を検出し、第12次調査6トレンチで再建期金堂基壇の北面階段の痕跡が、7トレンチでは再建期金堂基壇整地面の北への広がりを検出するなど、一定の成果を上げた。

『2012年報告』では2時期の基壇が重複していることを考慮して創建期金堂基壇、再建期金堂基壇として報告しているので、これを踏まえてそれぞれの基壇の様相を概述する。

B. 創建期金堂基壇の基壇構築

第6次調査2・3トレンチ、第10次調査5トレンチ、第11次調査5トレンチで創建期金堂基壇の積み土の版築を検出した。創建期基壇の構造は、基壇周縁の地山面を掘り込み、基壇部分の地山面を掘り残すことで基壇基部を作り出した、いわゆる地山削り出しの基壇である。基壇の部分ではさらに版築状に土砂を積み上げている。

〈第6次調査2トレンチ〉

SB060201は地山面の標高23.8～24.15m付近まで黒褐色砂礫土、黒色土を積み、さらに疊混じりのぶい黄褐色土を標高24.1～24.2mまで積み、その上に標高24.2～24.3mまで黒色土を叩き締め、標高25.5mまで黄褐色砂礫土、黒褐色砂礫土を2、3cmの単位で互層に積み、叩き締めて版築とする。

〈第10次調査5トレンチ〉

SB100501は標高24.15m前後の地山面の上に暗褐色土、暗褐色砂礫土、暗褐色粘土、黒色土、黒色

砂質土、黒色粘土、黒褐色土、黒褐色砂質土、黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土、褐色粘土など多様な土砂を1~5cmほどの単位で水平に盛土して締める様相を確認した。ただし、基壇東辺から2mほど内側の範囲では褐色粘質土、褐色土、黑色土、黒褐色粘土、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色土、暗褐色粘質土などの多様な土砂を小ブロック単位に盛土する。積み方に法則性は見られず、基壇外装が石積みであったとすれば裏込め土として小単位ごとに盛土したものと考えられる。

<第11次調査5 レンチ>

SB110501は、暗褐色土、暗褐色砂礫土、暗褐色粘土、黑色土、黒色砂質土、黒色粘土、黒褐色土、黒褐色砂質土、黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土、褐色粘土など多様な土砂を1~5cmほどの単位で水平に盛土し、叩き締めている。基壇の北辺と東辺は再建期基壇 SB110502 の積み土の中にあるため、基壇外装の様相は不明であるが、平面で検出した基壇縁辺のラインは不定形であり、凹凸も激しいことから石積み基壇であったとすれば、再建期の段階には既に失われている可能性が高い。

C. 創建期金堂基壇の基壇外装と整地層

第10次調査4 レンチで基壇南辺の西端付近に伴うと考えられる溝 SD100401 と整地層を、第10次調査5 レンチで SB100501 東辺とこれに伴うと考えられる溝 SD100501 と整地層を検出した。

基壇周縁は、削り出した基壇周囲の部分をそのまま溝とするため、その外側に整地を施し、若干の溝外側の立ち上がりを造り出している。基壇外装の様相は不明。

<第10次調査4 レンチ>

後世の削平により基壇自体は失われている。創建期の整地面の標高は23.45~23.55mで、南と西に向かって整地面の標高が緩やかに低くなる。黒褐色土を一括して水平に盛土して整地層とする。整地土には拳大の礫を含むが、瓦の混入は見られない。創建期の整地面と地山面を掘り込む溝 SD100401 は創建期金堂基壇南西隅部を想定する地点のすぐ南に位置し、基壇南辺に伴う雨落ち溝にあたるものと考えられる。溝の幅は南北1.35m、深さは創建期の整地面から0.33m。埋土は再建期の整地土で埋め殺されている。第10次調査5 レンチ検出の SD100501 と同様、創建期金堂基壇の南辺の構築に際して掘込地業によって地山層を掘削し、南側に整地土を盛ることで溝を造り出したものと考えられる。

<第10次調査5 レンチ>

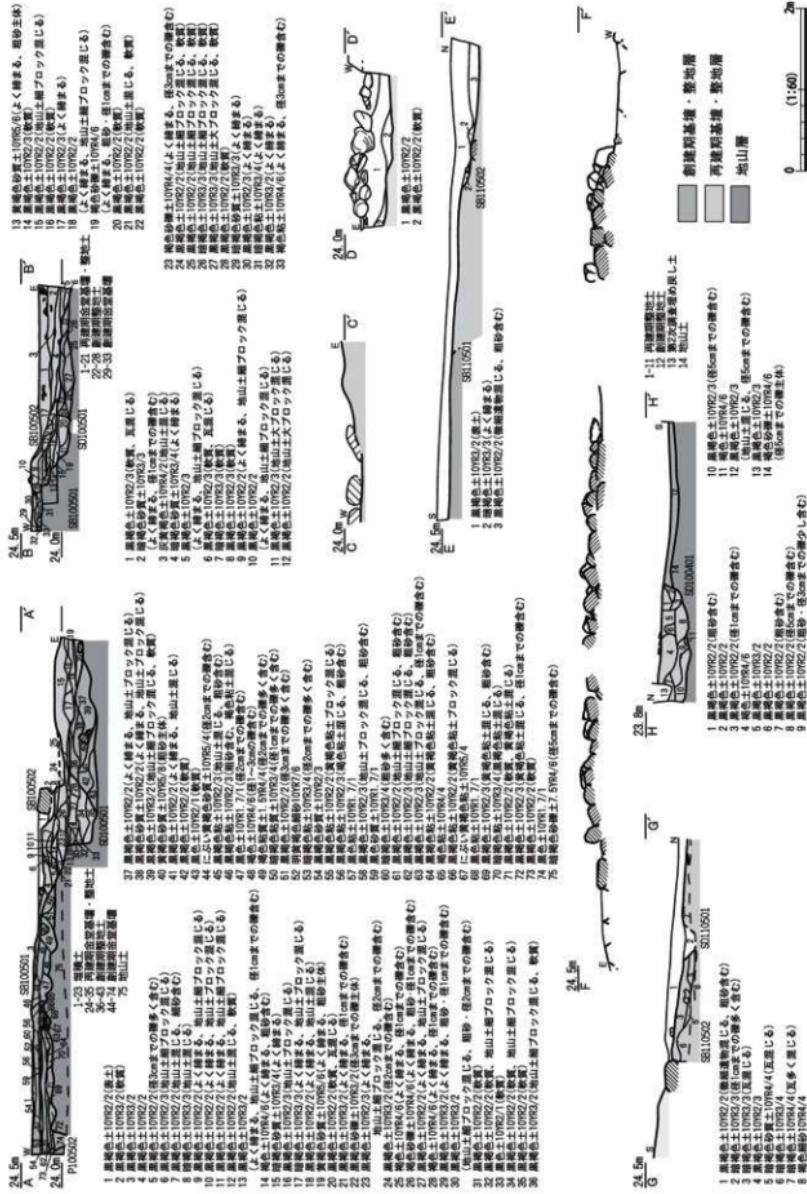
SB100501 東辺での断割部分の土層断面を観察すると、基壇縁辺の地山層が垂直に掘削された痕跡が認められるが、この部分が基壇東辺に沿う雨落ち溝の内側の立ち上がりとすれば、垂直に削られた地山層の内側のところに基壇東辺の外装施設が存在したものと考えられる。基壇東辺に伴う掘込地業が基壇外の外側(東側)に向けて約2.3mの範囲に施されており、基壇東辺の付近では垂直に地山面を掘削した後、外側に向けて斜めに立ち上がる。最深部の標高が約23.55mである。基壇東辺に沿う箇所を溝 SD100501 としてそのまま残し、その外側に黒色土、黒褐色土、黒褐色砂質土、黄褐色砂質土を大ブロック単位で不規則に盛土することで整地面を造る。

SD100501 の幅は東西1.05m、深さは創建期の整地面から0.33m、断面形状は崩れた箱形で、埋土は再建期の金堂基壇東辺の造営にあたっての整地土、基壇積み土にあたり、溝を埋めるように大ブロック単位で水平に黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、褐色砂礫土、黒褐色砂礫土、黒色土などを積み上げる。

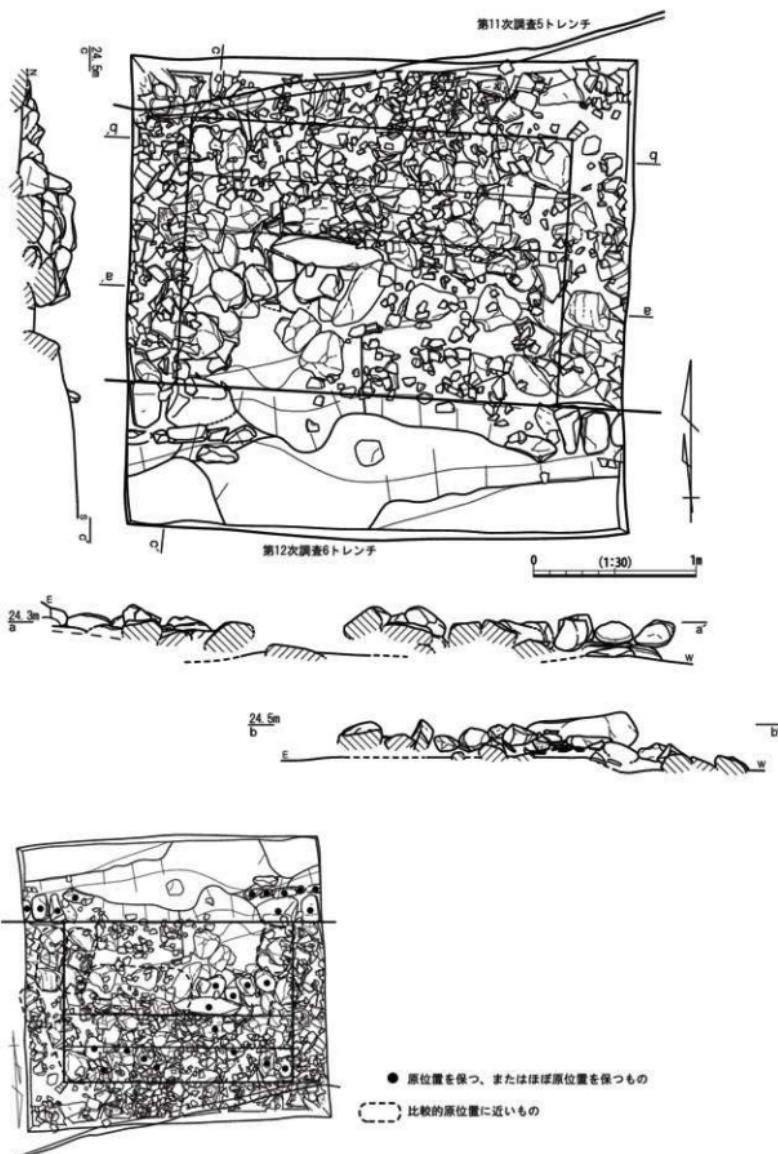
創建期の整地面の標高は23.9mで、東に向けて標高が低くなる。再建期金堂基壇の東辺は創建期基壇の東辺を埋め殺して拡張して造られるので、再建期金堂基壇の東辺とこれに伴う整地層が創建期遺構の上位に位置することになる。



第 83 图 金堂基址平面图 (缩尺 1/100)



第 84 図 金堂基礎十層断面図 (縮尺 1/60)



第 85 図 金堂基壇北面階段平面図・立面図（縮尺 1/30）



第 86 図 金堂基壇北側塑像螺旋出土位置図（縮尺 1/150）

D. 再建期金堂基壇の南辺・西辺外装と整地層

第10次調査4トレンチで基壇南西隅部付近の整地層を、第6次調査3トレンチ、第11次調査6トレンチで基壇西辺と整地層を検出した。

再建期の金堂基壇は建物軸を若干変え、創建期基壇の北側と東側を拡張し、南側と西側は削り取る形で造り替えがなされた状況が認められる。基本的には創建期と同じ基壇をそのまま用い、外縁を造り直すが、再建期金堂基壇の西側の様相を見る限り、創建期基壇の周縁を削平し、その部分に外装として石積みを施し、基壇の外側に整地を加えて基壇の縁辺を造り出している。基壇の南側については基壇自体が削平されているため、判然としない。

<第10次調査4トレンチ>

創建期金堂基壇の南西隅部付近では、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、灰白色粘土などからなる創建期基壇に伴う溝SD100401の埋土がそのまま再建期の整地面をなし、大ブロック単位に不規則に溝を埋め、再建期の整地面を造る様相を確認した。整地面の標高は23.6～23.65mで、北側に向けて若干標高が高くなる。

<第6次調査3トレンチ>

SB060301 西辺では、標高23.8m付近の整地面に自然礫による石積みを施し、基壇外装とする。現存する1段目の石積みは0.3m内外の未加工の花崗岩を横位に、奥に控えを取って小口面を外に向けて並べる。石積みの裏込め部分の基壇積み土から丸瓦、平瓦が出土し、石積みの下には偏行唐草文軒平瓦1点が瓦当面を外側に向けて差し込まれている。基壇の外側では地山面の上に整地面が分布する。

<第11次調査6トレンチ>

SB110601 西辺付近では、黄褐色土や黒褐色土の盛土で基壇を造ったものと考えられる。基壇西辺には石積みがあったようで、西側に約0.4mずり落ちた状態で石積みの基底石に相当すると思われる長辺0.3～0.4mの大ぶりな自然礫3石が現存する。標高23.75～23.9mに基壇西辺に伴う整地面があり、整地土は黒褐色土からなり、第10次調査6トレンチ検出の再建期の整地面とほぼ同標高である。

E. 再建期金堂基壇の東辺外装と整地層

第6次調査2トレンチ、第10次調査5トレンチで基壇東辺と整地層を検出した。

再建期基壇の東辺は創建期基壇を拡張して造られている。創建期基壇東辺に伴う整地層をかさ上げするとともに、創建期基壇東辺の外側に盛土を施し、縁辺に石積みを施して外装とする。

<第6次調査2トレンチ>

SB060201 東辺では、標高24.1m付近の地山面に黒褐色土、黄褐色砂礫土を積み、長辺0.6m前後、短辺0.3m程の自然礫を横位に、奥に控えを取らずに石積みの1段目を置き並べて外装とし、一部に石積みの2段目が残る。使用石材は花崗岩で、加工痕跡は認められない。石積みの1段目下に偏行唐草文軒平瓦1点が瓦当面を外側に向けて差し込まれ、また石積みの裏込め土に軒平瓦、隅落とし平瓦、丸瓦、平瓦が混入する。基壇の外側には残存度の高い瓦片が東辺から2.2mの範囲の地山直上にまとまって分布し、さらに東方に広がりをもつ。

<第10次調査5トレンチ>

SB100502 東辺は、SB100501 東辺の外側に基壇の積み土を広げるよう拡張し、東辺の石積みを施している。基壇積み土の部分は創建期基壇東辺の溝を埋めるように大ブロック単位で水平に黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、褐色砂礫土、黒褐色砂礫土、黒色土などを積み上げて盛土で造り、東辺に石積みする。外装の石積みは基本的に2段目までが残るが、基壇縁辺から0.3mほど東にずり落

ちるようすに2次的に移動している。石積みの基底石は長辺0.6m内外、短辺0.4mほどの大ぶりの自然石を横に長く取る。標高24.0～24.1mに基壇東辺に伴う整地面があり、整地土は黄褐色砂質土、黒褐色土、暗褐色土、暗褐色砂質土で、層厚も最大で0.35mに及ぶなど厚く、瓦片を多く含む。最上位には暗褐色砂質土を0.15mの厚みで水平に積んでいる。第6次調査2トレンチ、SB100502東辺で完形に近い大ぶりな瓦が密に混入していたのはこの層にあたる。

F. 再建期金堂基壇の北辺外装と整地層

第6次調査3トレンチ、第7次調査4・5トレンチ、第10次調査6トレンチ、第11次調査5トレンチ、第12次調査6トレンチで基壇北辺と整地層を検出した。

再建期基壇の北辺は、東辺と同様、創建期基壇を拡張して造られ、石積みを外装とする。基壇の外側には整地層が広がる。

〈第10次調査6トレンチ〉

再建期金堂基壇の北西隅部に伴う整地層は方形の壇状をなし、整地面の標高は23.85m、西と北に向かって傾斜し、整地面の標高が急激に落ち込む。整地面上では、0.2～0.3mほど浮いた状態で東西方向に1.5mほど延びる石列を検出した。この石材法量は長辺0.3m前後、短辺0.2～0.3mほどの自然礫で、どちらかと言えば南側に面を揃えている。後世において、再建期金堂基壇の北辺石積みの人為的な2次的移動があったものと考えられる。

〈第11次調査5トレンチ〉

SB110502北辺の東側3/4ほどにあたる。SB110502北辺付近は創建期の基壇SB110501北辺からさらに北側に基壇の積み土を広げるように拡張し、基壇の方位をSB110501からやや東に振って北辺の石積みを施す。基壇積み土の部分は黄褐色粘砂土を主体として、黄褐色や黒褐色系の砂礫土、粘土とともに小プロック状に積み上げて盛土で造る。

SB110502北辺の外装は石積みで、2段目までが残る。基底石の上面は標高24.25m前後、2段目の上面は標高24.45mに揃えた傾向がある。石積みの基底石は長辺0.5m内外、短辺0.2～0.3mほどの自然石を横に長く取って下面の再建期整地面に直接据え、2段目は0.2～0.3mの自然石を横長手積み、あるいは小口積みする。石材の石種は花崗岩が主体を占める。

基壇北辺の中央付近の石積みが途切れる部分に北面階段が取り付く。横小口積みで積まれた石積みの2段目が東西ともに縦小口積みとなる部分に階段の側面が位置するものと考え、階段幅2.4m程と考えられる。周囲には階段の構成材とみられる自然礫が散在する。

基壇北辺から外側に向かっては堆積層が広がり、拳大から人頭大ほどの自然石とともに多量の瓦片、土器、塑像螺髪、鉄釘などが含まれる瓦溜まり層を構成している。瓦の出土量はかなり多いが、大ぶりの破片も乏しく、近接のもの同士の接合関係が乏しい一方で、離れたところから出土した瓦同士が接合するなど、瓦溜まり層の搅拌も相応にあったよう接合率は低く、搅乱されている。

標高24.2mには基壇北辺の再建期整地面がある。基壇北辺の石積み基底石はこの整地面に据えられたものであるが、この整地土は粘砂質の精緻な暗褐色土層からなり、層厚も最低でも0.3mに及ぶなど厚く、瓦片を密に含むという特徴がある。SB100502東辺に伴う暗褐色粘質土で完形に近い大ぶりな瓦が密に混入していた整地層の最上位層と対比できる。

SD110501はSB110502北辺から北に1.3mほど離れた再建期の整地面で検出したもので、南北幅0.39mと東西に細長く延び、暗褐色土を埋土にもつ。SB110502北辺に平行する溝で基壇の雨落ち溝の一部である可能性もあるが、あまり東西に伸張した痕跡もない。

<第12次調査6トレンチ>

SB120601は第11次調査5トレンチ検出の基壇北辺の中央部分を再検出したものである。基壇北面の中央に取り付く階段は、階段部分に基壇北辺の石積みが見られないことから基壇構築時に基壇と階段を一体的に造ったものと考えられる。階段の踏み面の1段目と2段目が比較的よく残り、階段の東西側面の崩れた痕跡を確認できる。階段幅は東西幅2.35m、階段の出は南北1.64mである。階段の1段目、2段目の踏み面の幅がそれぞれ0.37m、0.35mほどで、1段目の標高約24.1m、2段目の標高約24.22mと高低差が0.2m強であることから、元々の基壇上面までの階段の踏み面を5段として、5段目の基壇上面までの高さは1m弱に復元できる。

階段構成材の石種は花崗岩、砂岩が主体を占めている。階段の踏み面の1段目は1辺が0.2mほどのやや小ぶりな石材の安定面を上に向けて敷き並べ、間に瓦片を水平に詰めたようにして踏み面としている。階段前面の整地面の標高24.0～24.1m、階段の1段目の石材の下部はこの整地面に据えられている状況を検出した。2段目と3段目の踏み面の一部にも敷き石の痕跡が認められることから、階段の踏み面は石敷きであった可能性が高い。2段目と3段目との間には幅0.7mほどの長い石を3段目の前壁として用いている。階段が崩された部分から平高台をもつ土師器椀が出土し、大体の寺院の廃絶時期を示している。

階段の側面は基壇北辺の小口積みで積まれた石積みの2段目が東西ともに縦小口積みとなる部分から北に階段の側面が延び、長辺0.3m内外の人頭大の自然礫の小口面を外側に向かながら基壇石積みと段数を合わせながら積み上げたものと考えられる。しかし、東西の側面ともに石積みが崩れており、西側の側面で辛うじて石積みの痕跡を留めている。

なお、トレンチ北東隅部の付近には講堂基壇から延びてくる黒褐色土が、微細遺物の混じる興道寺廃寺特有の再建期の整地層の特性を示していることから、再建期の金堂基壇の北側の整地面の上に再建期の講堂基壇の整地面が被覆している可能性が考えられる。

G. 金堂基壇の様相

創建期の金堂基壇の南北軸の方位は座標北から6度西偏する。標高24.1m前後の高さに基壇基底部が分布し、東辺整地面の標高が23.9m、南西隅部整地面の標高で23.45～23.55m、東辺付近の地山面の標高が23.55～23.75m、南西隅部付近の地山面の標高で23.4mであるので、大規模な地山層の削り出しによる地業が施された状況がうかがえる。

基壇の規模は東西約16.8m、南北約13.8mに復元できる。再建期の基壇積み土に埋め殺された縁辺に外装の痕跡は遺存しないが、石積みであった場合、再建期に再利用した可能性は考えられる。地山層を削り出して基壇の縁辺を造り出すように基壇の周囲に掘込地業を施し、基壇の縁辺部分をそのまま溝の底面として残し、その外側に盛土による溝の外側の立ち上がりを造り出し、さらに外側に整地を施している。基壇積み土は地山面の上にかなり精緻で堅固な版築を施している。基壇周囲に分布する瓦溜まりは再建期の整地土に埋め殺されており、大ぶりで遺存状況のよい瓦群が多く含まれている。この再建期の整地層には全ての型式の軒瓦が含まれている。

再建期の金堂基壇は創建期の基壇をそのまま利用しながら北側と東側を若干拡張し、南側と西側を削平して造る。金堂基壇の南北軸の方位は座標北から2度東偏し、創建期の段階から大きく東に振れる。北辺整地面の標高24.1～24.2m、北側整地面の標高23.95～24.5mと一定の比高差があるが、おむね標高24.1～24.2m前後の高さに整地面が分布し、この上に基壇を盛土で構築する。

基壇の規模は東西約18.0m、南北約14.1mで、外装に石積みを伴う。南北中央に柱間1間分の幅

の階段が付設されていたものと考えられ、北面階段の幅 2.4m、階段の出 1.6m 前後に復元されることから、基壇の高さは 1m 弱（現存高は約 0.2～0.3m）、金堂の建物の柱間は 2.4m として、東西 5 間、南北 4 間、つまり東西 12.0m、南北 9.6m の平面規模が復元できる。

第 2 項 塔基壇の様相

A. 塔基壇の調査概要（第 87～89 図）

塔基壇の調査に該当する調査箇所は第 1 次調査 2 トレンチ、第 2 次調査 2 トレンチ、第 4 次調査 6・7 トレンチ、第 7 次調査 3 トレンチ、第 11 次調査 3・4 トレンチである。現在の微地形に基壇らしい痕跡は見られないが、表土下で再建期基壇が著しく削平された状態で検出されていることに起因する。

『2007 年報告』の中で基壇遺構 1 として示した。第 1 期調査の段階で第 1・2・4・7 次調査と既に複数次の調査が及んでおり、興道寺廃寺の調査の中でも比較的早い時期にその存在が明らかとなっていたものである。基壇西辺、東辺、北東隅部において地山層の割り出しや溝での区画による地業を部分的に検出し、一辺 12.0m の基壇規模を復元した。また、径 0.6～1.0m 前後、深さ 0.2～0.35m の礎石据え付け掘り方 3 基を検出し、その位置関係から四天柱 2 基、側柱 1 基を確認したものとして、方三間、中央間を広く取り 3.6m、両脇間 2.4m という塔初層の規模を復元している。

しかし、第 1 期調査の終盤から第 2 期調査に移行する中で、金堂基壇、中門基壇の調査によって寺院の建物基壇には複数時期、少なくとも 2 時期あることが想定され始めたことで、塔基壇に関しても既検出基壇の様相確認の必要に迫られた。既検出の塔基壇が創建期に伴うものであれば、当然、その上位に再建期の基壇が存在することが想定されたが、既検出の基壇を地山面まで掘削して検出したことから考えれば、表土下に再建期の基壇が潜在する可能性が高いことが考えられた。このため、再建期の塔基壇の面的な検出を目指して第 11 次調査 3・4 トレンチの調査を行ったところ、表土下で再建期と考えられる塔基壇（整地面）の東西の縁辺と南西隅部をかろうじて検出し、基壇検出面では複数の礎石据え付け掘り方を検出した。また、既調査箇所の第 2 次調査 2 トレンチ、第 4 次調査 7 トレンチではトレンチそのものが再建期の基壇積み土を断ち割り状に掘削し、地山面まで検出していたという過失があったことが判明したが、この部分において再度、地山面まで掘削し、トレンチ壁面での土層観察で創建期、再建期の基壇積み土が上下で重複する様相を確認した。この調査によって、上記の『2007 年報告』で示された事実に正しい部分と誤りである部分を確認することとなった。

『2012 年報告』では創建期塔基壇、再建期塔基壇として報告したので、これを踏まえてそれぞれの基壇の様相を概述する。

B. 創建期塔基壇の基壇構築

第 11 次調査 4 トレンチで地山面の上に断片的に残る創建期基壇の積み土を検出した。また、基壇面で、SB110401 に伴う礎石据え付け掘り方のうち、P110401・P110402(P040701) の 2 基を検出した。

創建期基壇の構造は、金堂基壇と同様で基壇周縁の地山面を掘り込み、基壇部分の地山面を掘り残すことでき壇基部を造り出したものである。

<第 11 次調査 4 トレンチ>

基壇部分の地山面の上に SB110401 の積み土が断片的に薄く残る。黒褐色土、黒色土をブロック単位に水平に盛土するが、創建期の金堂基壇で見られたような明瞭な版築は見られない。

P110401、P110402 の平面形態は崩れた方形を呈し、一辺が 1.0m ほどで、P110402 の底面付近には多くの根固め石を備える。

C. 創建期塔基壇の基壇外装と整地層

第2次調査2トレンチ、第4次調査7トレンチ、第11次調査4トレンチで基壇西辺に伴う地山削り出しと整地層、第2次調査2トレンチ、第7次調査3トレンチ、第11次調査4トレンチで基壇東辺に伴う区画施設を検出した。

金堂基壇と同様、基壇周縁は地山層を削り出した基壇の周囲をそのまま溝とし、その外側に整地を施して溝外側の立ち上がりを造り出す。基壇外装の様相は不明。

<第2次調査2トレンチ・第4次調査7トレンチ>

SB020201 東辺は、不定形な溝状をなす土坑 SK020204 を掘削することで基壇の縁辺を造り出す。基壇基底の地山面と基壇外東側の地山面との検出面でのレベル差はほとんどない。土坑の平面形態は南北に延びる幅の狭い溝状を呈し、一部で西側に広がる。溝の幅は東西最大3.02m、深さ0.12m。

反面、SB020201 西辺では外側に向けて広く地山層を深さ0.3~0.4mほど掘削することで標高23.8~23.85mに平坦面を造り出す。この地山層の削り出し部分、基壇西辺の断面形状は直立ではなく、直線的な傾斜をもつ。基壇東辺、西辺に石積みなどの外装は認められない。SB040701 西辺は、外側に向けて地山層を削り出して構築する。

<第7次調査3トレンチ>

基壇の北東隅部にあたる。土坑 SK020204 が北に延びて接続する溝 SD070301 によって基壇内外を区画する。基壇側の溝の断面形状はやや直線的に鋭く立ち上がる。底面は基壇面と約0.3mのレベル差をもつ。北側のトレンチでは、地山削り出しによる落ち込みが見られ、土器、瓦を含む黒褐色土が堆積する。この落ち込みが基壇北辺に伴うものとすれば、西辺と同様の基壇構築と再建段階の整地があつたものと考えられる。

<第11次調査4トレンチ>

SB110401 西辺から外側に向けては地山面の上に黒褐色土を水平に一括で盛土し、創建期の整地面とし、基壇西辺に沿う溝を造り出す。溝の幅は東西1.0mほどで、底面まで浅い。

D. 再建期塔基壇の基壇構築

第11次調査4トレンチで創建期の塔基壇の積み土の上で再建期の整地層と再建期基壇の積み土を検出した。また、SB110402 の基壇面で土坑 SK110401、礎石据え付け掘り方のうち、P110403~P110409 の7基を検出した。

再建期の基壇の構造は、創建期の基壇、整地層とほぼ同箇所で、その上に整地土、基壇積み土を盛土することで構築する。

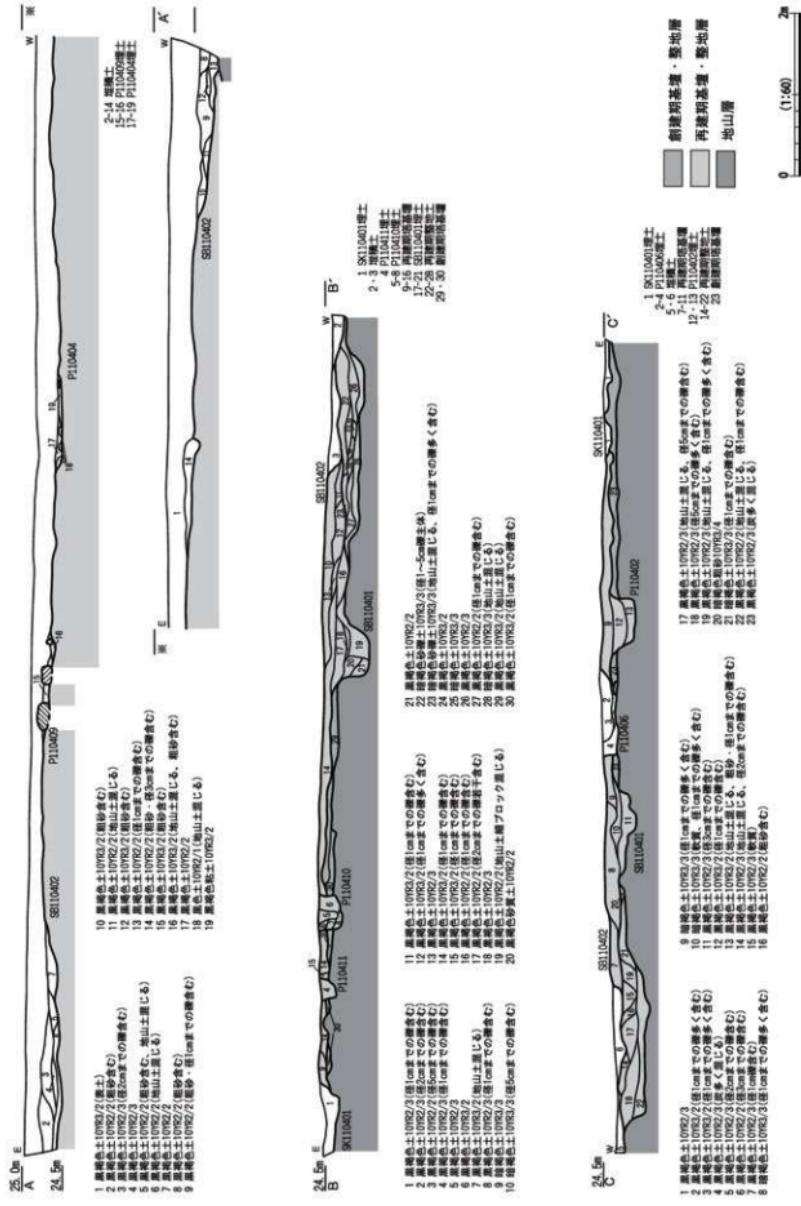
<第11次調査4トレンチ>

基壇部分の地山面、創建期の基壇積み土の上に SB110402 の積み土が部分的に薄く残る。暗褐色土、黒褐色土を水平に盛土する。

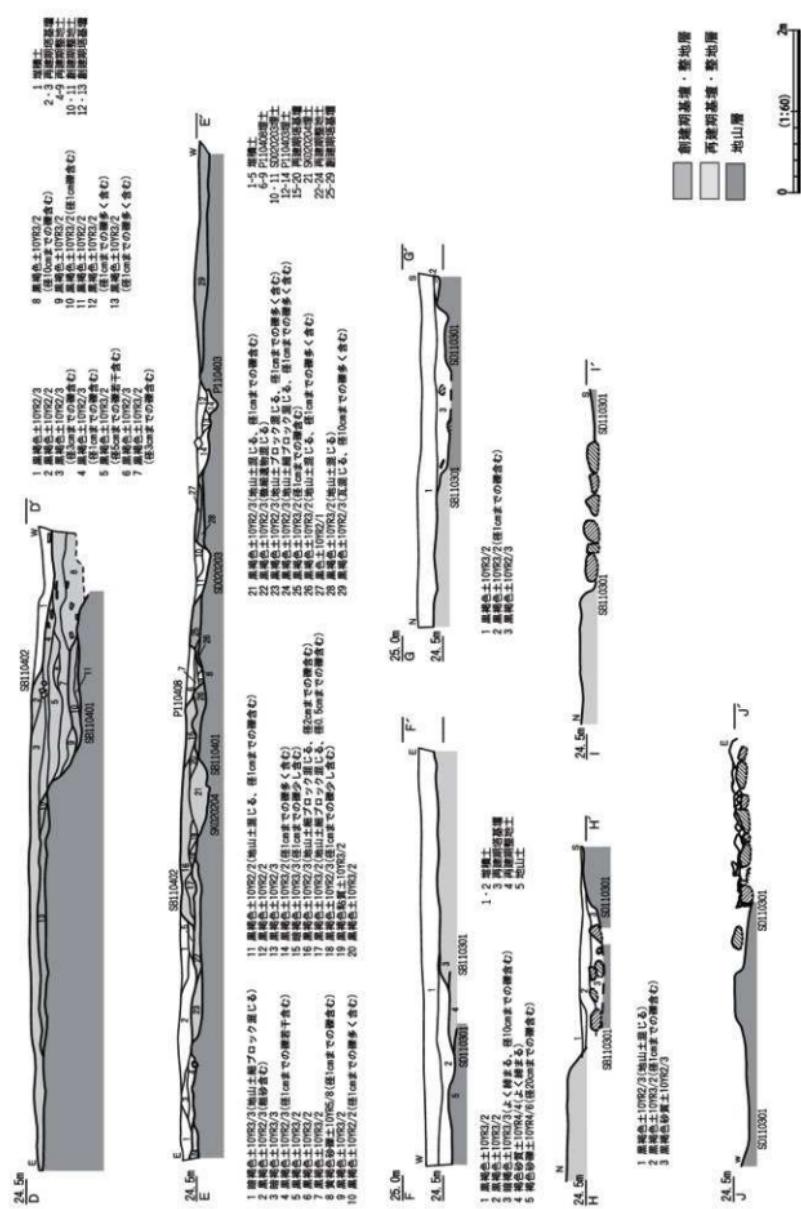
SK110401 は心礎抜き取りのために後世に掘り込まれた土坑と考えられ、P110403~P110409 のうち、四天柱は P110403、P110404、P110405 の3基、側柱は P110406、P110407、P110408、P110409 の4基が該当する。四天柱、側柱ともに柱間は3.0m、礎石据え付け掘り方の平面形態は円形や隅丸方形で、その規模も径や一边の長さが1mを超える大きい。一方で検出面から底面までは浅く、P110406、P110409 の底面では長辺0.2~0.3mほどの自然縫の根固石を検出しているように、基壇の削平が顕著である。柱穴3基(P110410~P110412)は掘り方の径も小さく、建設足場の柱穴と考えられる。



第87図 基塙平面図 (縮尺 1/100)



第 88 図 塔基壇十層断面図 1 (縮尺 1/60)



第 89 図 塔基壇土層断面図 2 (縮尺 1/60)

E. 再建期塔基壇の基壇外装と整地層

第 11 次調査 3・4 トレンチで塔基壇の東西の縁辺と、基壇部分の全体を覆う整地層を検出した。また、再建期基壇に伴うと考えられる遺構として、第 1 次調査 2 トレンチで基壇状の遺構 SX010201 を検出した。

再建期の基壇は、創建期の基壇と周囲の整地層の上に直接盛土を施すことで、塔基壇の基底面を造り出し、基壇部分ではさらに盛土を施すことで基壇の立ち上がりを造るが、遺存状況が悪い。基壇外装の様相は不明であるが、石積み基壇である可能性は残る。

<第 1 次調査 2 トレンチ>

SX010201 は基壇の東南隅部にあたるものと考えられ、最大幅 0.79m、深さ 0.26m の細い溝を東面と南面に廻らせて内外と区画する基壇状の遺構である。東面する溝の内側の立ち上がりには 0.3m までの礫を積むようあるが遺存状況は悪い。

<第 2 次調査 2 トレンチ>

SB020202 西辺の地山削平面には礫、粗砂、大量の瓦片が混じる黒色土、黒褐色土を水平に盛土することで整地面を造る。『2007 年報告』ではこの整地層を堆積層として報告したが、後の第 11 次調査 4 トレンチでの土層断面の精査により再建期の整地層に相当することが判明した。地山面直上に残存率が高い瓦片が基壇西辺から約 4.0m の範囲にわたってほぼレベルを揃えてまとまって分布し、瓦溜まりをなすが、再建期の整地段階で埋め殺されたものである。基壇西辺に石積みなどの外装は認められない。

<第 4 次調査 7 トレンチ>

SB040701 西辺の外側には粗砂が混じる黒褐色土、黒褐色砂礫土が 0.2~0.25m ほど堆積分布するが、再建期に伴う整地層にあたる。基壇西側の地山面の削り出し部分（標高 23.9m）の直上において瓦片が東西 1.7m の範囲にまとまって分布する。

<第 11 次調査 3 トレンチ>

SB110301 南西隅部にあたる。基壇の積み土は暗褐色土で、基壇に伴う整地層は褐色砂質土からなる。基壇から南西に 0.6m ほど不定形に張り出した部分の整地面は精緻に造り、黄褐色粘土を貼り付けた痕跡を検出した。この部分の整地面の直上からは正位の状態で墨書がある須恵器蓋 1 点が完形で出土した。

SB110301 南西隅部の構築にあたっては標高 24.35m 付近まで地山面を 0.1~0.15m ほど掘削する掘込地業を施した後、褐色砂質土からなる整地土を水平に盛土し、さらに内側に褐色砂礫土を基壇状に盛土している。

SD110301 は再建期塔基壇の南西隅部を構築する際の掘込地業と整地土の盛土によって造り出された溝である。不定形に SB110301 の南側と西側を廻り、東西幅 1.63m、南北幅 2.59m、深さ 0.28m。基壇南側の溝の底面には、南北 1.77m、東西 2.20m の範囲に集石があり、大きいもので長辺 0.5m、短辺 0.3m、小さいもので拳大ほどの花崗岩、砂岩などの自然礫を集めたものであるが、石材の法量規格は乏しく、石敷きと言えるような意図的な配石や平坦面を上方に揃えたような痕跡は見られない。底面の直上で検出されていることから後世の埋没とも考えにくいが、集石の性格は不明である。積極的に評価すれば西側に近接する整地面から出土した墨書き器とも関わり、祭祀に伴うものと考えられるが、寺院廃絶時に基壇の構成材が 1 箇所に寄せ集められた可能性もある。

<第 11 次調査 4 トレンチ>

SB110402 の東西規模は約 15.3m。基壇東西の縁辺に基壇外装は見られず、基壇の東西辺と見るか、

基壇を載せる整地面の東西辺と見るか、検討の余地もあるが、現段階では前者と考える。SB110402 の基壇積み土は基壇外の再建期の整地面と一体的に施し、創建期基壇の積み土、あるいは整地面や地山面の上に黒褐色土、黒褐色粘質土、暗褐色土、暗褐色粗砂、暗褐色砂礫土、黒褐色砂質土を大ブロック単位で水平に盛土する。

F. 塔基壇の様相

創建期の塔基壇の南北軸の方位は座標北から 6 度西偏する。基壇の規模は一辺 12.0m、基壇の西側では金堂基壇と同様に地山層を削り出して基壇縁辺を造る。外側に向けて整地を施し、溝を造り出した痕跡も認められる。基壇西辺での地山面標高は 24.25m。基壇の東側は溝を掘削することで基壇内外を区画したようである。基壇東辺での地山面標高は 24.5m。

基壇周囲の再建期の整地層に金堂と同様に大ぶりの瓦片が埋め殺されているが、整地土そのものは金堂と比べて粗く、あまり締まりもない。

再建期の塔基壇は創建期の基壇の下部を埋め殺し、全体的に拡張して造る。塔基壇の南北軸の方位は座標北から 10 度西偏する。基壇部分での整地面の標高 24.25~24.5m、東辺の整地面の標高 24.55m、西辺の整地面の標高 24.25~24.4m、南西隅部付近の整地面の標高 24.45m とばらつきはあるが、標高 24.5m 弱の高さに整地面が分布し、この上に基壇を盛土で構築する。塔基壇の規模は一辺約 15.3m の規模に復元されるが、この範囲が基壇の縁辺となるものか、実際の基壇縁辺は中寄りに位置し、基壇を載せるための整地面の範囲を示すものかははっきりしない。創建期の地山層の削り出しによって造られた塔基壇の下部をそのまま残して、上にかさ上げするように基壇を造ったと考えられるが、基壇の検出面で礎石据え付け掘り方の底部をかろうじて検出した状況を考えれば、基壇自体は相応の削平を受けている。基壇検出面から心礎抜き取り坑、四天柱の礎石据え付け掘り方三基、側柱の礎石据え付け掘り方 4 基を検出し、その位置関係から柱間の長さは中央間 3.3m、脇間 3.0m に復元される。基壇の周囲からの瓦などの出土量は多くなく、金堂での出土量に比べれば相当少ない。

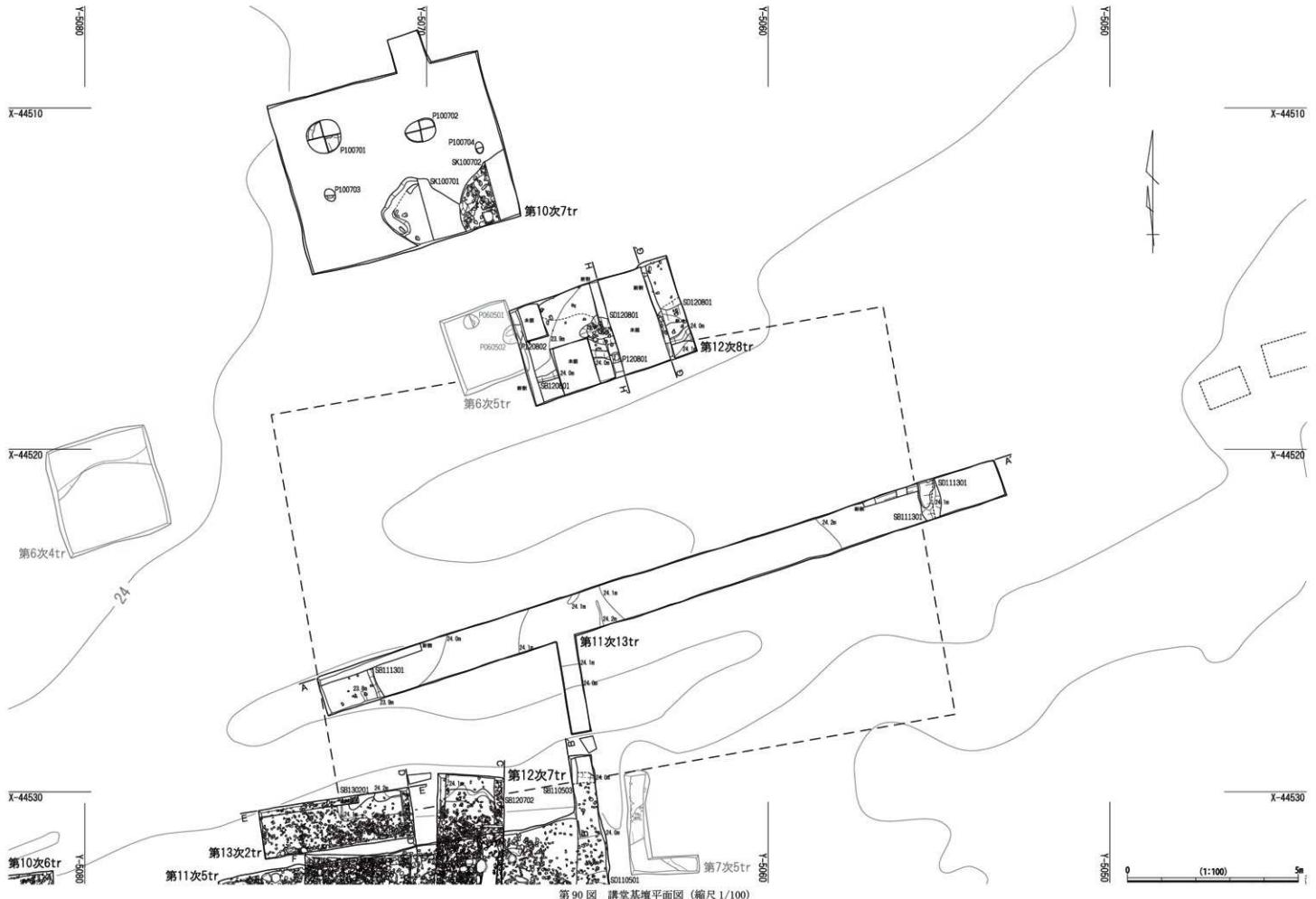
第 3 項 講堂基壇と伽藍北限の様相

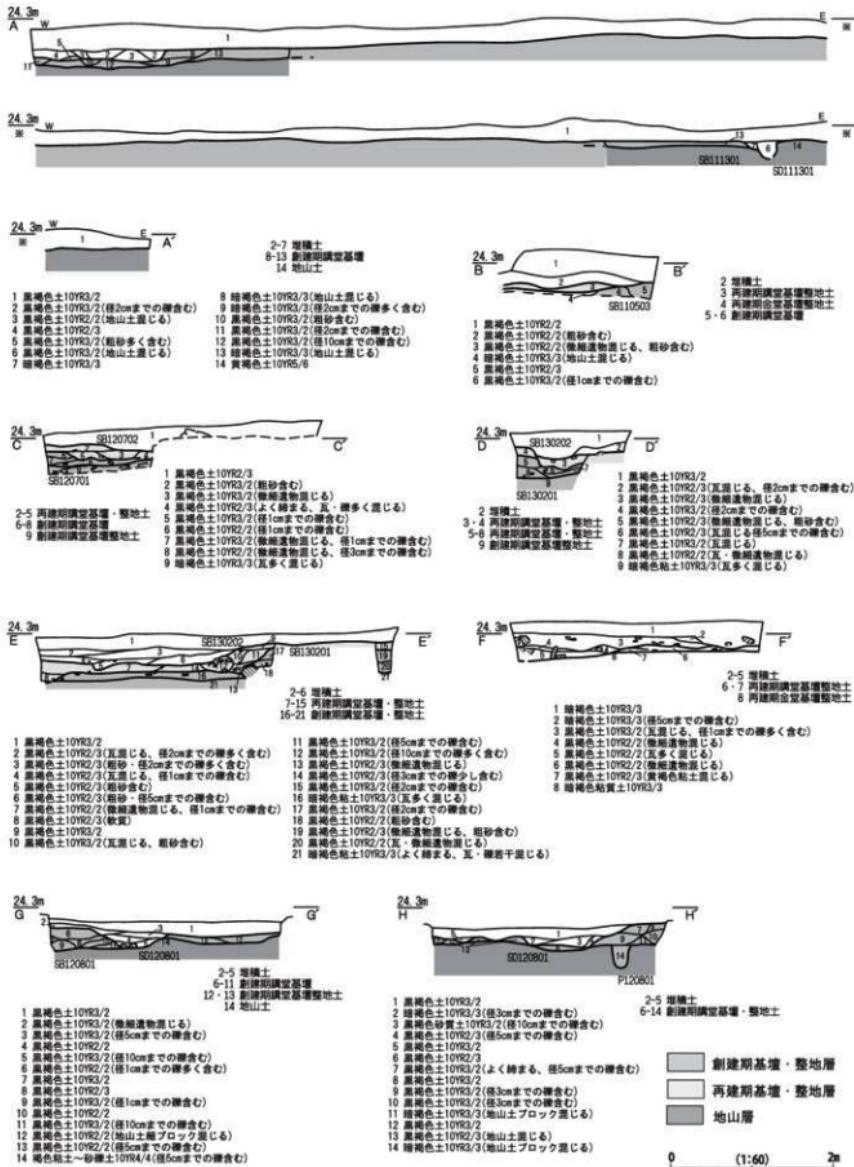
A. 講堂基壇と伽藍北限の調査概要（第 90~93 図）

講堂基壇の調査に該当する調査箇所は第 6 次調査 5 トレンチ、第 11 次調査 5・13 トレンチ、第 12 次調査 7・8 トレンチ、第 13 次調査 2 トレンチである。現在の微地形にわずかに基壇状の土地の高まりが認められ、基壇西辺・東辺の位置をうかがうことができる。第 1 期調査において講堂基壇の所在は不明であり、『2007 年報告』では第 10 次調査 9 トレンチ付近にその所在を想定した。

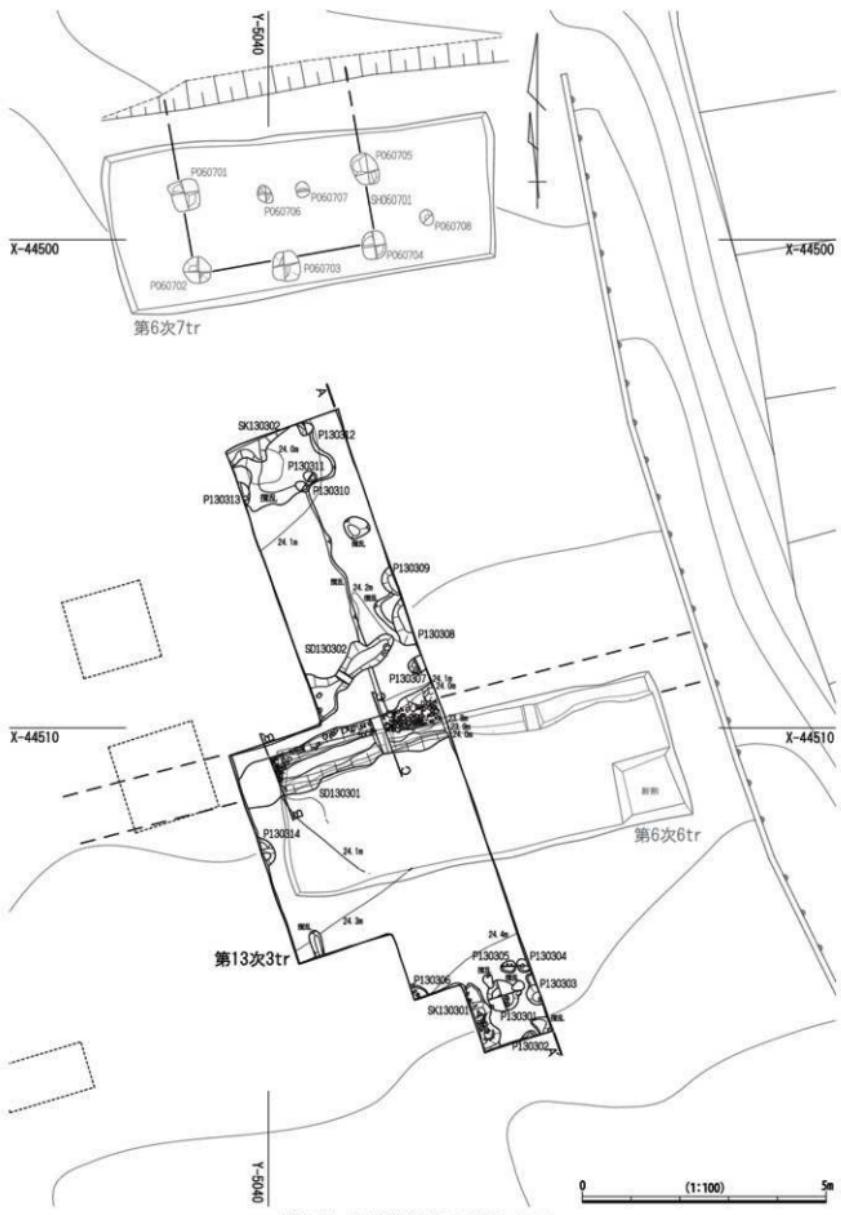
第 9 次調査以後、金堂基壇とその周辺での調査が進み、第 11 次調査 5 トレンチで 2 時期の金堂基壇が南北に重複して位置することが判明したが、このトレンチの北への拡張部分で講堂基壇と考えられる基壇の南辺を検出し、また第 11 次調査 13 トレンチで基壇の東辺を検出したことで、再建期金堂基壇のすぐ北側に講堂基壇が近接して位置することが明らかとなった。

しかし、確認された基壇は金堂基壇に近接しすぎており、その時期も不明であるという課題が浮上したことから、講堂基壇南辺の位置を確認するために第 12 次調査 7 トレンチ、同様に北辺の位置を確認するために第 12 次調査 8 トレンチで調査を行い、それぞれの基壇縁辺を検出した。さらに、第 13 次調査 2 トレンチで基壇南西隅部の調査を行ったところ、基壇西辺および整地面の断割部分で上下に位置する 2 時期の基壇西辺を検出し、創建期講堂基壇南側の整地面、再建期金堂基壇北側の整地面、再建期講堂基壇南側の整地面が下から順に分布する状況を検出した。





第91図 講堂基壙土層断面図(縮尺1/60)



第92図 伽藍北限平面図（縮尺1/100）

伽藍北限については、第 10 次調査まで講堂基壇が未検出であったため、第 1 期調査の段階では伽藍北限に関する具体的な検討が及ぶことはなかったが、第 11・12 次調査で講堂基壇を検出し始めたことと、第 11 次調査で再建期中門基壇の南西側で東西溝を検出したことで、再建期に伴う伽藍を画する施設が存在する可能性が浮上した。第 6 次調査 6 トレンチで既検出の溝 SD060601 が講堂基壇の東方に位置することから、この溝が伽藍北限に関連する施設である可能性を考慮して、第 13 次調査 3 トレンチで調査を行ったところ、東西に延びる溝 SD130301 が再検出され、伽藍北面は溝の内外で区画した可能性が高まった。

B. 創建期の講堂基壇

第 11 次調査 5・13 トレンチ、第 12 次調査 7・8 トレンチ、第 13 次調査 2 トレンチで創建期の講堂基壇の積み土と基壇縁辺、整地層を検出した。

基本的には地山層の削り出し基壇であり、基壇周縁で掘込地業を施し、その上に基壇積み土を盛土する。基壇の北側では周囲に整地を施しているが、基壇の南側では金堂基壇の整地層と複雑な上下関係をなす。このため、整地面の検出レベルの標高を適宜、付記する。

〈第 11 次調査 5 トレンチ（北側拡張部）〉

SB110503 南辺の基壇積み土は黒褐色土からなり、大ブロック単位で盛土する。基壇南辺の裾部に被せるように標高 23.95~24.0m 付近に暗褐色土からなる再建期金堂基壇北側の整地面が薄く分布し、その上位には標高 24.0~24.05m に微細遺物が混じる黒褐色土からなる再建期講堂基壇南側の整地面が薄く分布する。

〈第 11 次調査 13 トレンチ〉

SB111301 の基壇積み土は暗褐色土からなり、ほぼ水平に一括盛土するが、西端付近では暗褐色土、黒褐色土を小ブロック単位で水平に盛土する。いずれも創建期金堂基壇に見られるような版築は認められない。表土直下で基壇積み土を検出しておらず、一定の基壇削平がうかがえる。SB111301 東辺に伴うと考えられる掘込地業は、基壇東辺から西に向けて地山面を 0.1m ほど掘削し、そのまま基壇土を盛土する。検出面の標高は 24.1m 付近、検出範囲は東西 2.28m。掘込地業の東端は一段深く掘削し、基壇を盛土するため、基壇東辺に沿った溝 SD111301 を造り出す。地山面に掘り込まれた掘込地業の一部が溝 SD111301 となり、基壇東辺の雨落ち溝をなす。SD111301 は東西幅 0.62m、深さ 0.20m。

〈第 12 次調査 7 トレンチ〉

SB120701 南辺の基壇積み土は黒褐色土からなり、ほぼ水平に盛土する。トレンチ東端では基壇積み土の基底部の黒褐色土が整地面を覆って南側に張り出している。この基壇に伴う整地面として標高 23.9~24.0m に創建期の金堂基壇に伴うと考えられる瓦片が多く混じる暗褐色土層の上面が分布し、その上に SB120701 を載せている。なお、断割部分では創建期講堂基壇に伴う整地面の上に南側から延びてくる再建期金堂基壇北側の暗褐色土からなる整地土が薄く載る。この整地面の標高は 23.95~24.05m 前後。

〈第 12 次調査 8 トレンチ〉

SB120801 北辺の基壇積み土は黒褐色土、暗褐色土からなり、小ブロック単位にある程度水平に盛土する。基壇外装は見られない。基壇構築に伴う掘込地業は基壇北辺から南に向けて施され、地山面から掘り込み、底面の標高 23.8m まで掘削し、基壇の盛土を施している。掘込地業北辺と基壇盛土との間は溝状をなし、基壇北辺の雨落ち溝であったものと考えられる。溝の北側は標高 23.95m で整地面をなし、黒褐色土を大ブロック単位で水平に盛土し、その上面を整地面とする。SD120801 は南北幅 1.24

m、深さ 0.15m。

〈第13次調査2トレンチ〉

SB130201はSB130202の下層にあり、基壇の南西隅部にあたる。基壇積み土は黒褐色土からなり、大ブロック単位でほぼ水平に盛土する。トレンチ東端では基壇積み土の基底部の黒褐色土が整地面を覆って南側に張り出している。基壇西辺の裾部（基底部）には一辺 0.2mほどの小ぶりな花崗岩の自然礫1石が整地面に据えられている。外装の石積みの基底石にあたるものか、はつきりしない。

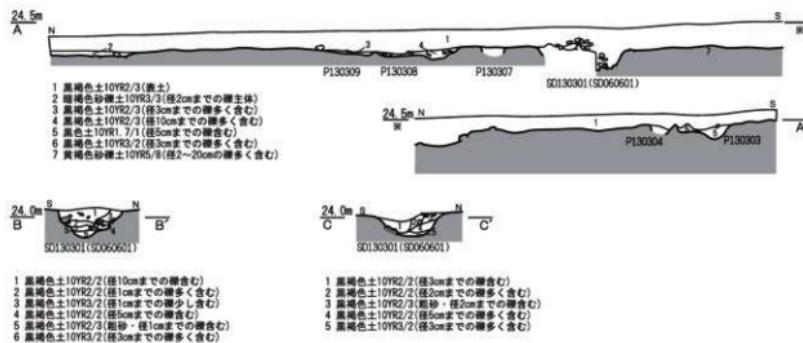
この基壇に伴う整地面として標高 23.8~23.95mに創建期の金堂基壇に伴うと考えられる瓦片が混じる暗褐色土層の上面が分布し、SB130201を載せている。第12次調査7トレンチで見られたような、再建期金堂基壇に伴う整地面の北側への伸張はこのトレンチでは見られない。

C. 再建期の講堂基壇

第12次調査7トレンチ、第13次調査2トレンチで再建期の講堂基壇の縁辺と整地層を検出した。再建期の講堂基壇は基壇南辺の西側で造り直しの痕跡が見られるが、基本的には創建期の基壇をそのまま踏襲して基壇としている。

〈第12次調査7トレンチ〉

SB120702は創建期の基壇SB120701の上に位置し、基壇南辺を検出した。基壇積み土は黒褐色土からなり、水平に盛土する。基壇南辺のラインは不定形で、外装も見られない。この基壇に伴う整地面として標高 24.15mに黒褐色土層の上面が分布する。



第93図 伽藍北限土層断面図（縮尺1/60）

〈第13次調査2トレンチ〉

SB130202はSB130201の上に位置し、基壇の南西隅部を検出した。基壇積み土は黒褐色土からなり、水平に盛土する。基壇外装は見られない。基壇の西辺は創建期の基壇西辺を埋め殺すように盛土で造る。この基壇に伴う整地面として標高23.95～24.05mに黒褐色土層の上面が分布する。この整地面自体は創建期金堂基壇の西辺裾部を埋め殺すように水平に盛土する。

D. 講堂基壇の様相

創建期の講堂基壇の南北軸の方位は座標北から10度西偏する。講堂基壇は東西約18.0m、南北約12.0mに復元できる。基壇の北側と東側は基壇縁辺付近に掘込地業を施した後、その底面から基壇積み土を盛土しながら、基壇縁辺をそのまま溝とし、北側ではその外側に整地を施している。基壇東辺付近の地山面の標高24.1m、基壇北辺付近の地山面の標高23.8～23.85m。一方、基壇の南側ではおそらく地山面あるいは創建期金堂基壇北側の整地面の上に黄褐色系の良質な粘土、粘質土を用いて整地し、その上部に基壇の積み土を載せている。基壇南辺の整地面の標高23.9～24.0m、基壇西辺の整地面の標高23.8～23.95m、基壇北辺の整地面の標高23.95mと標高24.0m弱に基準となるレベルがある。基壇西側ではこの整地面に据えた西辺石積みの基底石と考えられるものを検出しているが、これ以外に外装に関する情報はない。

再建期の講堂基壇は金堂基壇北辺階段に近接するあたり、基壇南辺の西側で造り直しの痕跡が見られる以外は創建期の基壇をそのまま踏襲し、基壇としている。講堂基壇は創建期基壇の同等規模と考えられる。金堂基壇北辺階段の前面での整地面の標高は24.0～24.1mで、講堂基壇の造り直しにあたっては盛土による若干の整地が施され、創建期基壇の西辺を覆うように再建期基壇の西辺を造る。再建期金堂基壇階段付近においては改変を受けて補修的な造営が行われ、創建期基壇の南西隅部付近には再建期基壇および整地面を覆う再建期整地層が分布しているものと考えられる。

E. 伽藍北限の様相

第6次調査6トレンチ、第13次調査3トレンチで検出した東西溝SD130301(SD060601)は、幅1mほどで、一定の深さがあるなど興道寺廃寺で検出されている溝の中ではしっかりと造りのもので、溝の西への伸張方向が講堂基壇の北辺であることから寺域北限を画する施設に伴う溝である可能性がある。SD130301は、南北最大幅1.12m、深さ0.33m。北側から順に埋没した土層堆積を示し、埋土には拳大から人頭大ほどの自然礫が底面からかなり浮いた状態で含まれる。

第4項 中門基壇と伽藍南限の様相

A. 中門基壇と伽藍南限の調査概要（第94～100図）

中門基壇の調査に該当する調査箇所は第8次調査3トレンチ、第9次調査1・2トレンチ、第11次調査1・2トレンチ、第12次調査1・5トレンチである。基壇西辺のあたりで西に向かって一段低くなるなど、基壇の高まりが微地形に表れている。

『2007年報告』で基壇遺構3として示したのが第8次調査で検出した中門基壇である。その時点での基壇規模として東西9.2m前後、南北6.7mに復元され、基壇の積み土から瓦片や和同開珎、萬年通寶、神功開寶の銭貨が出土したことから、再建期に伴う中門基壇である可能性が示唆された。第1期調査の大きな成果は、中門基壇の調査内容から寺院には創建の時期だけでなく、その後にも寺院造営が行われた時期、言わば再建期が存在する可能性が指摘され、再建期の基壇には外装に石積みを伴う

ことが確認されたことであった。

一方で、中門基壇の周辺の様相が不明である中、中門基壇そのものの基壇規模の確認、中門基壇に接続する南面回廊などの伽藍南限施設の存否確認の必要に迫られた。このため、中門基壇西側の様相確認のために第9次調査1トレンチで調査を行ったところ、再建期に伴う整地面を検出した。また、中門基壇東側の様相を確認するために第9次調査2トレンチで調査を行い、再建期中門基壇の北東隅部および創建期の中門基壇に伴うと考えられる掘込地業を検出した。このことから、中門基壇西側の様相を面的に把握するため、さらに第11次調査1トレンチ、第12次調査2トレンチで調査を行い、再建期整地面から掘り込まれた中門基壇南西の東西溝などを検出した。

B. 創建期の中門基壇

第9次調査2トレンチで再建期の中門基壇と南北軸の方位を違える掘込地業SK090204を検出した。
<第9次調査2トレンチ>

創建期の基壇そのものは未検出であるが、これに伴うと考えられる掘込地業SK090204の平面形態は方形で、地山面を深さ0.14m掘り込み、黒褐色土で叩き締めることで地業する。検出面の標高は23.7m付近で、この地業痕の東辺の南北方位は再建期中門基壇の南北軸の方位と異なり、どちらかと言えば創建期の金堂・塔基壇の南北軸の方位に近いことから、創建期中門基壇に伴う地業痕跡と考える。

なお、創建期の基壇に関連する遺構として、第8次調査3トレンチ、再建期中門基壇の南辺での断割部分で、基壇を載せる再建期の整地層下で地山面を掘り込む幅0.9mの溝SD080301を検出した。位置的には創建期基壇の南辺の雨落ち溝の一部である可能性も考えられる。

C. 再建期の中門基壇

第8次調査3トレンチ、第9次調査2トレンチで再建期の中門基壇を検出した。

再建期基壇は西側を中心に盛土による整地を施し、この整地面および地山面、創建期の掘込地業面の上に盛土を施し、縁辺に石積みを施して外装とする。

<第8次調査3トレンチ>

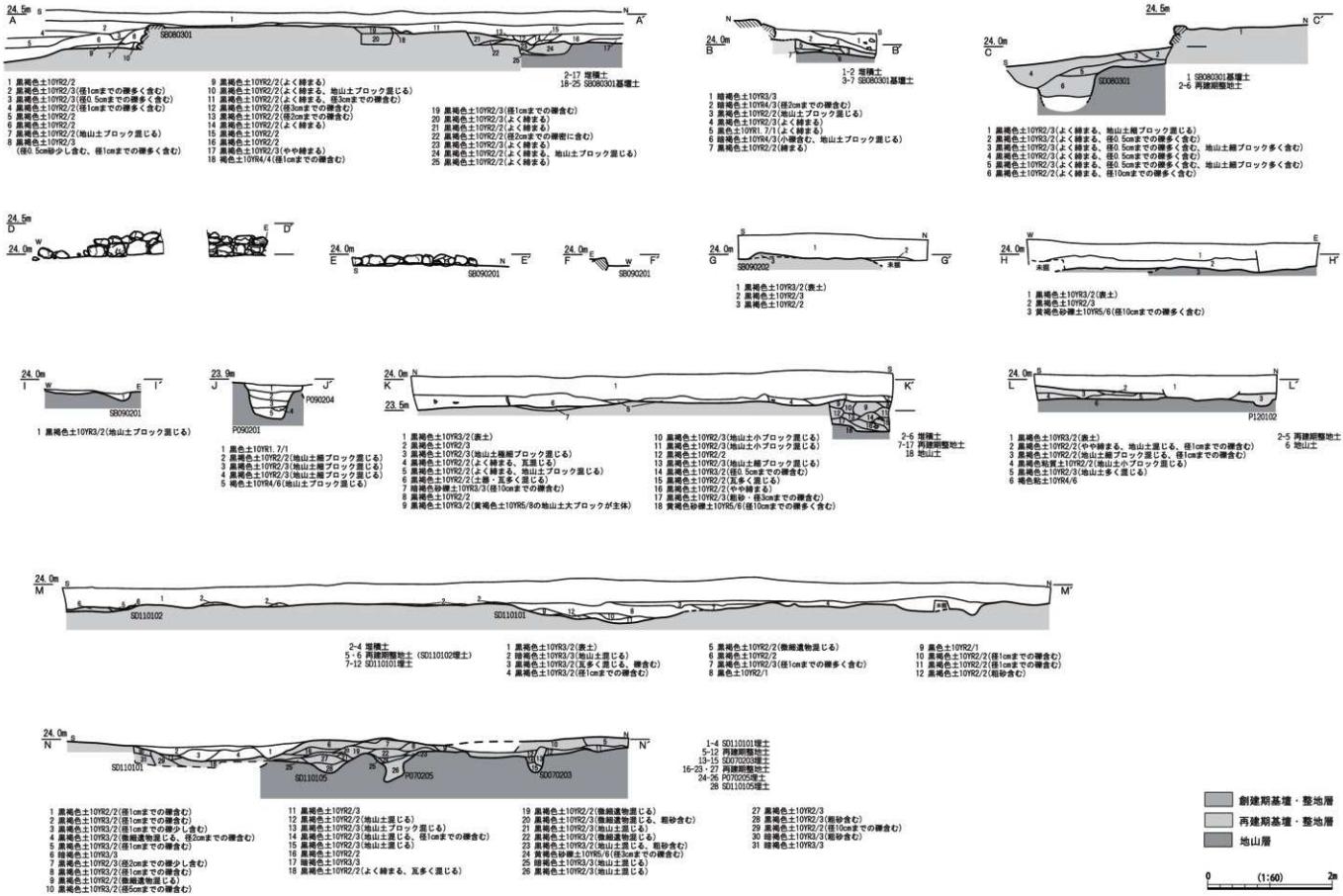
SB080301は南北6.64mの範囲に積み土が認められる。基壇西辺では一定の削平を受けているが、基壇の積み土は小礫や地山土ブロックが混じる黒褐色土が主体で、叩き締めて構築する。基壇積み土の断割部分から丸瓦、平瓦、錢貨などが出土した。基壇の検出面で褐色粘土を部分的に叩き締め、数cmの厚みをもつ箇所を確認したが、全体的には明瞭な版築痕跡は見られない。基壇面から若干浮いた状態で長辺0.42m、短辺0.35mの偏平な自然礫1石があり、安定面を上に向いていることから礫石であるものと思われるが、厳密に元位置を保っている保証はない。

基壇南辺の外装は石積みで、2段目までが残存する。使用石材は花崗岩、砂岩、チャート、緑色片岩などの自然石で、加工痕跡は認められない。石積みの礫は長辺0.3m強、短辺0.3m前後のもので、1段目は礫の平坦面を外側に向けて横位に置き、2段目は奥に控えを取って小口積み状に積む。石積みの西端は既に大半の礫が抜き取られ、遺存状況は不良である。

基壇の南側では地山面の上に整地面が広がり、その上に基壇基底部が位置する。小礫、地山土ブロックが混じる黒褐色土を基壇の石積み基底部となる標高24.0m付近まで2層に盛り、叩き締めることで構築する。



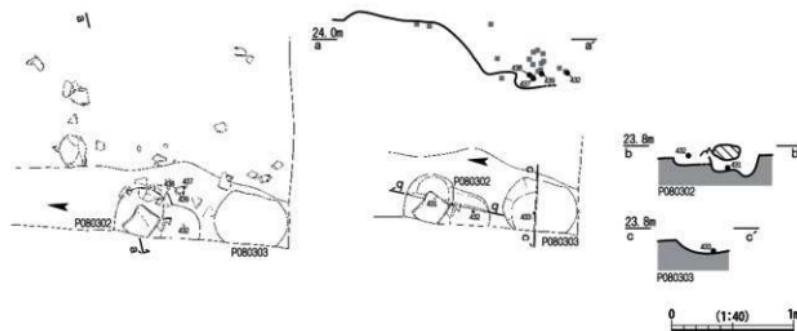
第94図 中門基壇平面図 (縮尺 1/100)



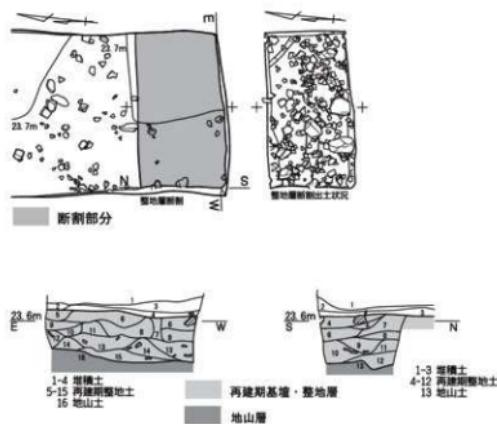
第95図 中門基壙土層断面図(縮尺1/60)

基壇の北辺では地山層を掘り込み、地山土ブロックが混じる黒褐色土を入れて叩き締める掘込地業を施す。元来、南に向けて緩やかに傾斜する地山面を基壇構築に際して南辺で盛土、北辺では地山の掘り込みを行うことで基壇最下面を平坦に整えたことがうかがえる。

基壇西辺で小穴 P080301～P080303 を検出したが、この箇所では基壇の遺存状況が悪かったこともあり、再建期の整地層にあたる部分を堆積層と誤認して地山面まで掘り進めた。検出は地山面である



第96図 SB080301 錢貨出土状況図（縮尺1/40）



第97図 中門基壇西側再建期地層断面図・土層断面図（縮尺1/60）

が、遺構の掘り込みは上位の基壇面もしくは整地面からである。P080302 の検出面のレベルには 0.25 m の偏平な自然礫があり、埋土には塊状に黄褐色土ブロックが含まれることから人為的な埋め戻しが行われた後、礎石として自然礫を据えたものと考えられる。P080302 底面から欠損した和同開珎 1 枚が水平な状態で出土した。P080303 は平面形態が円形を呈し、南北 1.10m と P080301、P080302 より大きい。P080303 底面から欠損した萬年通寶と思われる錢貨 1 枚が出土した。

〈第 9 次調査 1 トレンチ〉

再建期中門基壇の西側、標高 23.5～23.65m に整地面がある。基壇西辺付近の整地面の標高が 23.8 m 前後、西側の第 11 次調査 1 トレンチでの整地面の標高が 23.8m 前後であるため、第 9 次調査 1 トレンチ付近の整地面は後世の削平を受けているものと考えられる。整地面の上位には、トレンチ西側の第 7 次調査 2 トレンチ北壁 2 層と対応する黒褐色土が層厚 0.1～0.2m でほぼ水平堆積する。整地面の断割部分の土層観察から、整地層は黒褐色土を大ブロック単位に不規則に盛土し、層厚も最大で 0.6 m ほどに及ぶなど厚く、拳大から人頭大の自然礫とともに瓦片を多く含む。基壇構成材と思われる長辺 0.5m ほどの大ぶりな自然礫も含まれ、廃材を埋め戻しながら盛土地業を施した状況がうかがえる。整地面下、標高 23.0～23.2m で地山面に至る。

〈第 9 次調査 2 トレンチ〉

SB090202 は、第 8 次調査 3 トレンチ検出の再建期中門基壇 SB080301 の北東隅部にあたる。基壇積み土は黒褐色土からなる。基壇東辺は石積みの外装で 1 段目が残り、創建期中門基壇に伴う掘込地業面の上に載るように、礫の平坦面を外側に向けて奥に控えを取らずに横位に据える。石積みの石材法量は長辺 0.3m 強、短辺 0.2m 前後と規格的で、使用石種は花崗岩、砂岩が主体である。基壇北辺に石積みは見られず、基壇検出面からスロープ状に地山面へと至る。基壇の周囲には再建期の整地面は見られないが、東辺の石積みの基底面と地山面が標高 23.9～24.0m とほぼ同一の標高であることに起因するものと考えられる。

〈第 11 次調査 1 トレンチ〉

再建期中門基壇の西側の整地面にあたる。整地面を掘り込む溝 2 条 (SD110101・SD110102) 、土坑 3 基 (SK110101～SK110103) 、小穴 3 基 (P110101～P110103) が分布する。整地土は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色砂礫土などで、大ブロック単位で不規則に盛土する。溝 SD110101 の北側の整地面は幅約 3.0m ほどの帶状に標高が若干高くなる。SD110101 は東側に起点をもって西に延びる溝で、南北最大幅 3.32m 、深さ 0.33m 。中央が深くなり、黒色土、黒褐色土が大ブロック単位に水平に堆積する。

〈第 12 次調査 1 トレンチ〉

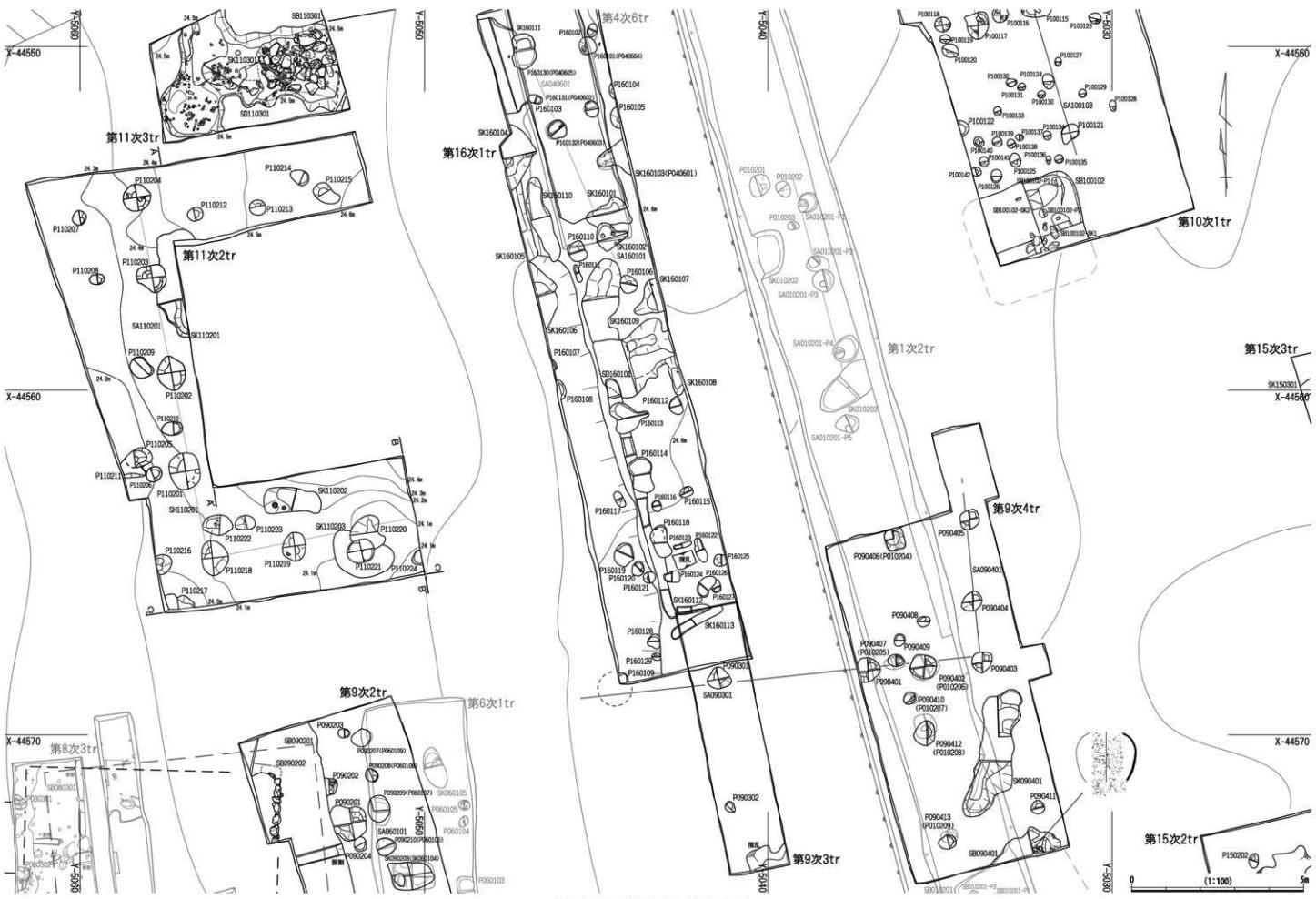
再建期中門基壇の北西側にひろがる整地面にあたる。整地層は黒褐色土、黒褐色粘質土からなり、水平に規則的に盛土する。

〈第 12 次調査 5 トレンチ〉

土坑、小穴などを検出したが、中門基壇に伴うものは未検出である。また、第 9 次調査 2 トレンチでも見るよう、中門基壇の東側には再建期の整地層は及んでいない状況が確認された。

D. 中門基壇の様相

創建期の中門基壇そのものは未検出であるが、創建期と考えられる掘込地業の東縁の南北方位から考えて金堂、塔とほぼ同一の方位の中門基壇が存在したものと考えられる。基壇の規模は不明であるが、机上の復元では東西 7.8m 、南北 6.0m を想定する。第 8 次調査 3 トレンチ検出の再建期整地層下の東西溝が基壇南辺の雨落ち溝と考えれば、基壇は再建期基壇とほぼ重複するものと考えられる。



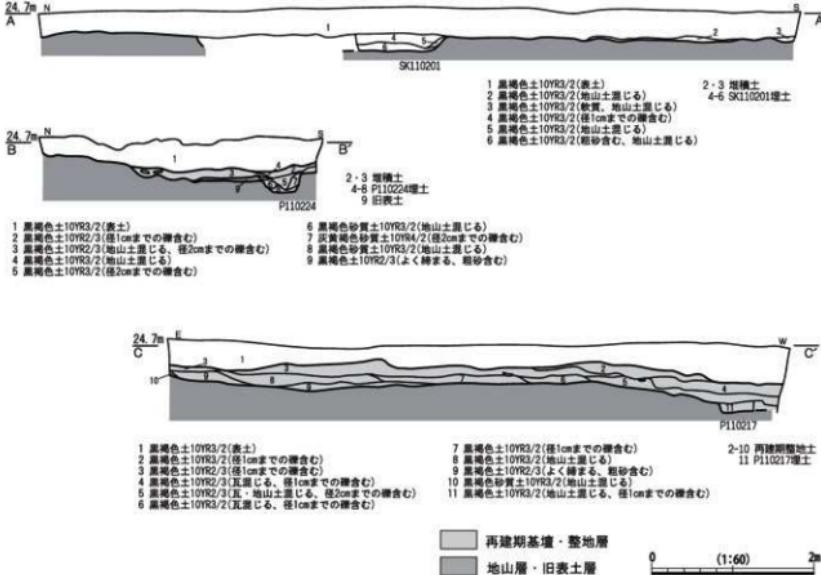
第98図 伽藍南限平面図（縮尺1/100）

再建期の中門基壇の南北軸の方位は座標北から2度東偏し、金堂基壇と同一である。標高23.9～24.0m前後の高さに整地面が分布し、この上に基壇を盛土で構築する。基壇の規模は東西約7.4m、南北約6.2mで、柱間は不明であるが、金堂に準じて2.4mとして東西3間、南北2間の建物が収まるほどの基壇規模である。外装に石積みを伴うものと考えられ、基壇の南辺と東辺に石積みが残るが、おそらく西側と北側にも存在したものと考えられる。基壇周囲の瓦の出土量は多くない。再建期の基壇積み土もしくは再建期の整地層にあたる部分から銭貨が出土していることが特徴である。

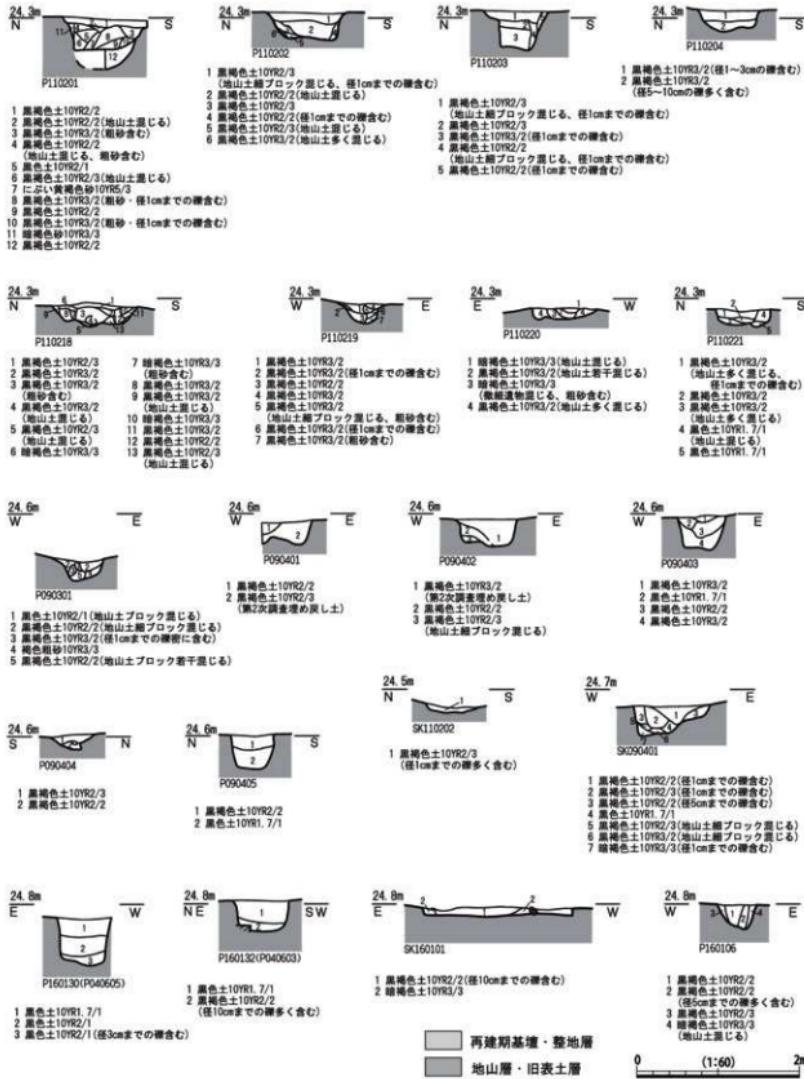
E. 伽藍南限の様相

次項で概述するが、創建期の中門基壇そのものの様相が不明である中、東方でL字状に折れる柱穴列SA090401(SA090301・SA160102)1基がある。P090401,P090402,P090403が南北に、P090404,P090405,P090301,P160109が東西に延びるもので、コーナー部分の柱間が1.5mで、隅部から離れると2.4mほどの柱間になる傾向がある。東西に延びる柱穴列は西に伸張すると創建期中門基壇の北辺のラインと重複するものと考えられ、創建期の伽藍南限に伴う遺構である可能性がある。

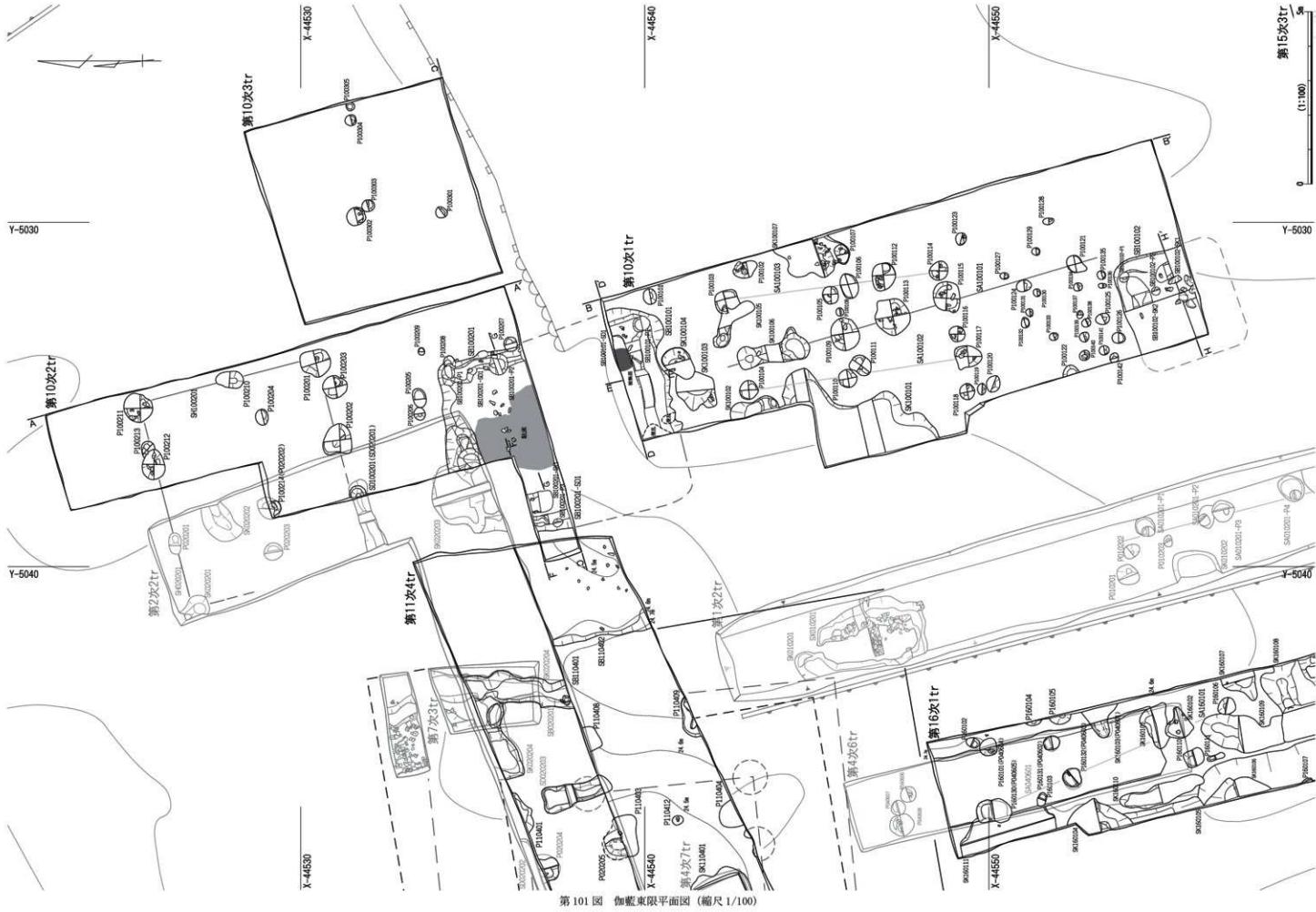
再建期の中門基壇の西側には、整地面の高まりが認められる。溝SD110101の北側に幅3.0mほどの範囲に整地面が全体的に盛り上がっており、SB080301のすぐ西側ではP080301,P080302が2.1mほどの幅をもって位置する。この部分に回廊状の施設が存在し、SD110101が南側の雨落ち溝であった可能性も考えられる。



第99図 伽藍南限土層断面図1 (縮尺1/60)



第100図 伽藍南限土層断面図2 (縮尺1/60)



第101図 伽藍東限平面図(縮尺1/100)

第5項 伽藍東限の様相

A. 伽藍東限の調査概要（第101～103図）

伽藍東限に関しては、寺域が所在する微高地の東側において整地層は存在せず、表土直下の地山面で遺構を検出するように、全体的に寺院関連遺構の検出面までが浅いため、第2期調査の段階で伽藍域、あるいは寺域を画する施設が遺存する可能性はあまり高くなかった状況が想定された。塔基壇と東側の段丘崖までの間は平面空間もあまりなく、伽藍東限を画する施設が存在するとすれば、この空間の中で検出できる公算が高かったことから、伽藍東限施設の検出を目的として第10次調査1～3トレンチの調査を実施したが、回廊、溝などの施設は検出できなかった。

B. 伽藍東限の遺構

第9次調査3・4トレンチ、第16次調査1トレンチにおいて検出した創建期の中門基壇と同一の南北方位と並行、直交するL字形に折れる柱穴列SA090401、あるいは第10次調査1トレンチで検出された柱穴列SA100101は、『2012年報告』で7世紀第4半期から8世紀前半に伴うものとして報告した遺構である。

また、第2次調査2トレンチ、第10次調査1・2トレンチ、第11次調査4トレンチにおいて堅穴建物跡SB100101(SB100201)、掘立柱建物跡SH100201(SH020201)を検出した。

（第9次調査3・4トレンチ）

堅穴建物跡SB090401は、第1次調査2トレンチ検出の堅穴建物跡SB100201の北東隅部にあたる。4本の柱が主柱穴となる構造であることが判明している。全体の平面形態は方形で、東西の規模は約3.3mに復元できる。出土土器の年代から7世紀前葉、TK209型式並行期の建物跡と考えられる。

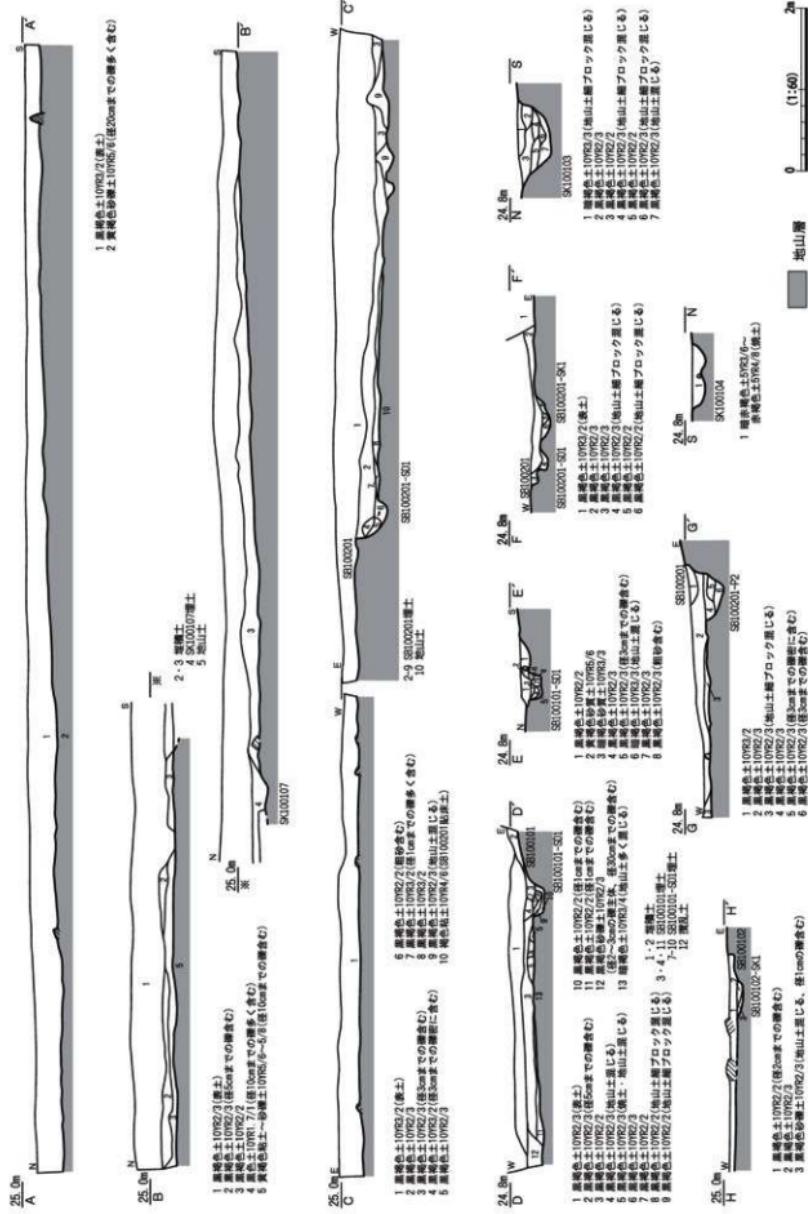
P090401～P090405とP090301、P160109の7基の柱穴で、L字形に直角に折れる柱穴列SA090301を構成する。東西4間、南北2間を確認した。『2012年報告』では、東西の柱筋の柱間は1.8m前後、南北の柱筋ははつきりしないが1.8mほどであることを報告したが、前項で述べたとおりコーナー付近の柱間が1.5m、隅部から離れると2.4mほどとなる見方もできる。柱穴の掘り方は1m前後と径も大きく、断面形状も箱形で、底面まで深い。7世紀後半から8世紀前半に伴う時期と考えられる。

（第10次調査1・2トレンチ）

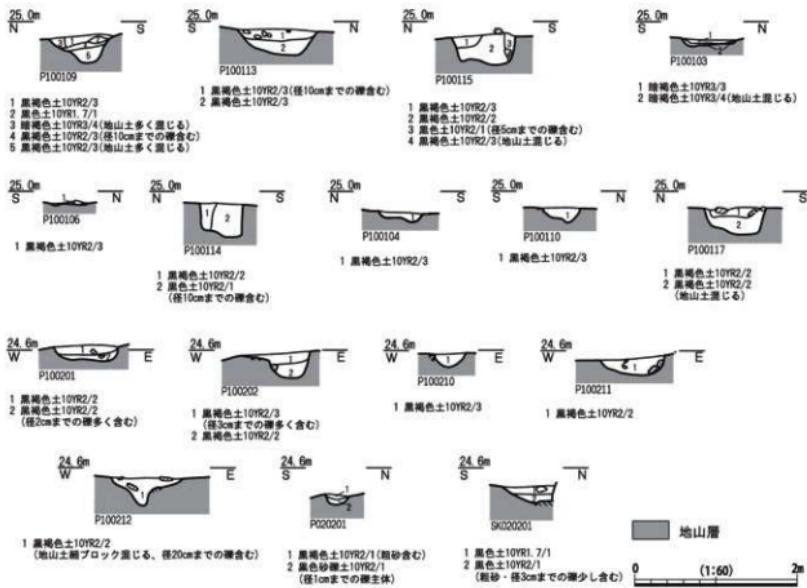
堅穴建物跡SB100101(SB100201・SK020203)の平面形態は歪な長方形で、南北6.91m、東西5.82mと南北に長い。床面の中央では少なくとも南北2.41m、2.69mの範囲に褐色粘土からなる貼床が施され、よく縮まる。床面の北東隅部付近、溝の内側の床面には東西0.54mの範囲に被熱面が残り、焼土が0.07mほど盛り上がっている。建物の周壁に沿って幅0.3～0.4mほどの溝を廻らせ、建物南辺では周壁と溝との間に幅0.5m前後のテラス状の平坦面をもつ。SK100104は暗赤褐色土、赤褐色土からなる焼土を埋土にもち、磁石に付く鉄粉が含まれ、北側の堅穴建物SB100101床面の被熱面と関連する遺構である可能性がある。出土遺物の年代から8世紀前半に伴う時期と考えられる。

柱穴の掘り方の径が大きいP100109、P100113、P100115、柱穴2基に相当すると考えられるSK100106、掘り方の径が小さいP100121、P100124の7基の柱穴が直線に並び、柱穴列SA100101を構成する。南北の柱筋の柱間は1.5m前後と考えられ、掘り方の径が大きい柱穴は、断面形状も箱形、あるいは崩れた箱形で底面まで深い。南北軸の方針から7世紀後葉から8世紀前半に伴う時期と考えられる。

P100104、P100110、P100117の3基の柱穴が直線に並び、柱穴列SA100102を構成する。2間分を確認した。P100111はP100110の建て替えに伴う柱穴の可能性がある。東西の柱筋の柱間は3.2m前後と長く、柱穴の掘り方の径はやや大きい。6世紀後半から7世紀前半に伴う時期と考えられる。



第102図 伊勢東限土層断面図 1 (縮尺1/60)



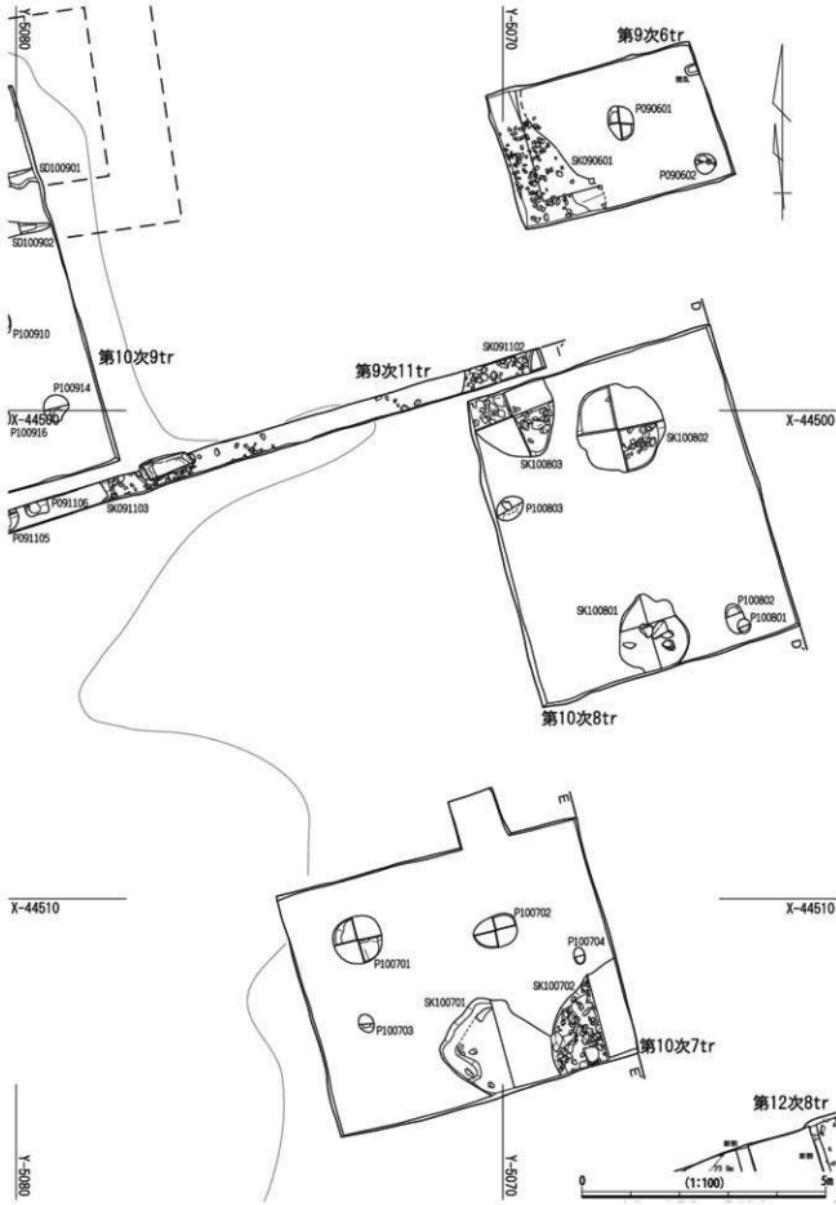
第103図 伽藍東限土断面図2 (縮尺1/60)

P100103、P100105、P100114の3基の柱穴が直線に並び、柱穴列SA100103を構成する。2間分を確認した。SA100102の東側に位置し、平行する。東西の柱筋の柱間は3.0m前後と長く、柱穴の掘り方の径はやや大きい。P100105が柱筋からやや西側に外れる。6世紀後半から7世紀前半に伴う時期と考えられる。

掘立柱建物跡P100201、P100202、P100210～P100212の5基の柱穴と第2次調査2トレンチ検出の柱穴2基(P020201、SK020201)で掘立柱建物跡SH100201の一部を構成する。東西3間、南北2間を確認し、東西の柱筋の柱間2.1m、南北の柱筋の柱間2.7m前後である。柱穴の掘り方はやや大きいが、底面まではさほど深くなく、断面形状も凹凸が激しい。建物の南北軸の方位から南側の竪穴建物と同時期、8世紀前半に伴うものと考えられる。

D. 寺域東限の様相

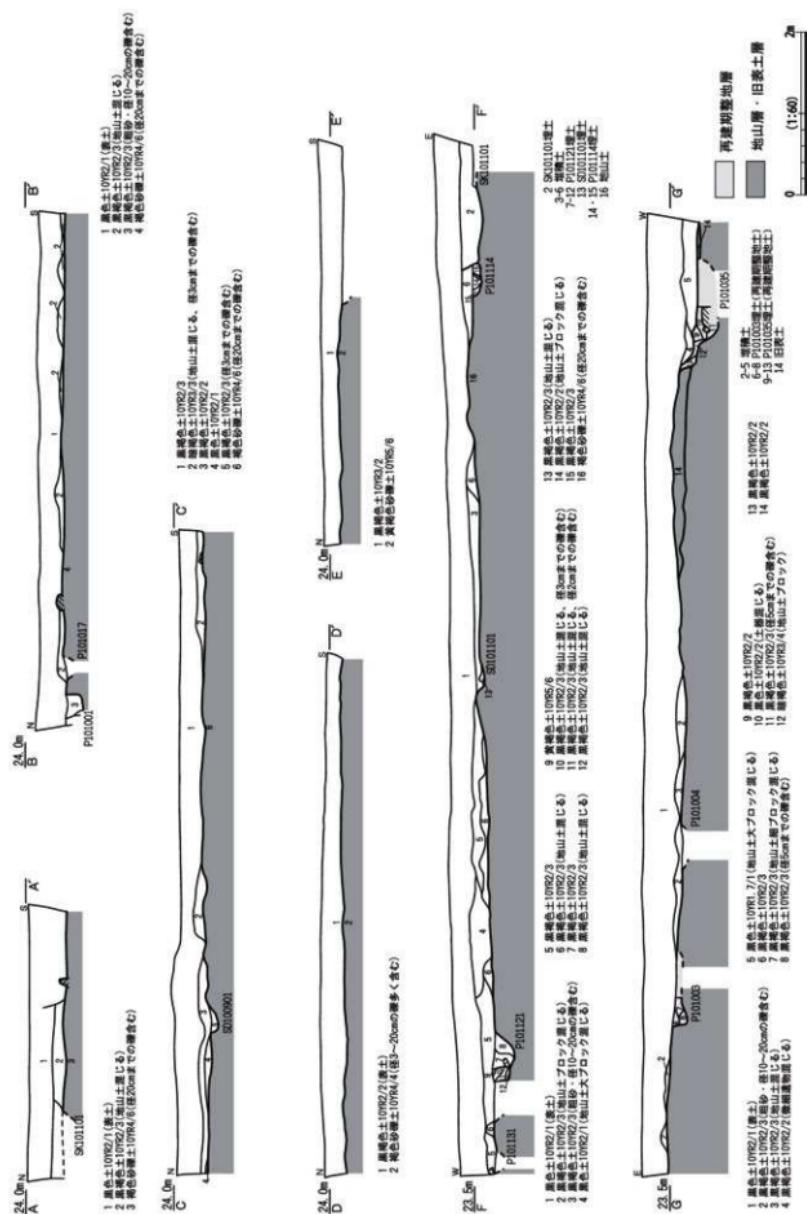
伽藍東限の様相は明らかではないが、再建期の中門基壇の西側と講堂基壇の北側と東側に検出されたような溝が存在する痕跡は認められない。ただし、創建期に関しては、柱穴列SA090401が西に伸張すると創建期中門基壇の北辺のラインに載り、柱穴列SA100103は創建期の建物基壇の南北方位と近い方位を示していることから、積極的に評価すれば伽藍域を画する施設の一部である可能性も考えられる。塔基壇の東側には同時期の竪穴建物などが位置しており、創建期塔基壇の造営に伴う工房的施設の一部と考えられるが、この建物が柱穴列SA100103の北側への延長ライン上に所在するなど、寺院建立初期において、伽藍を区画する施設は未発達であったものと推察される。



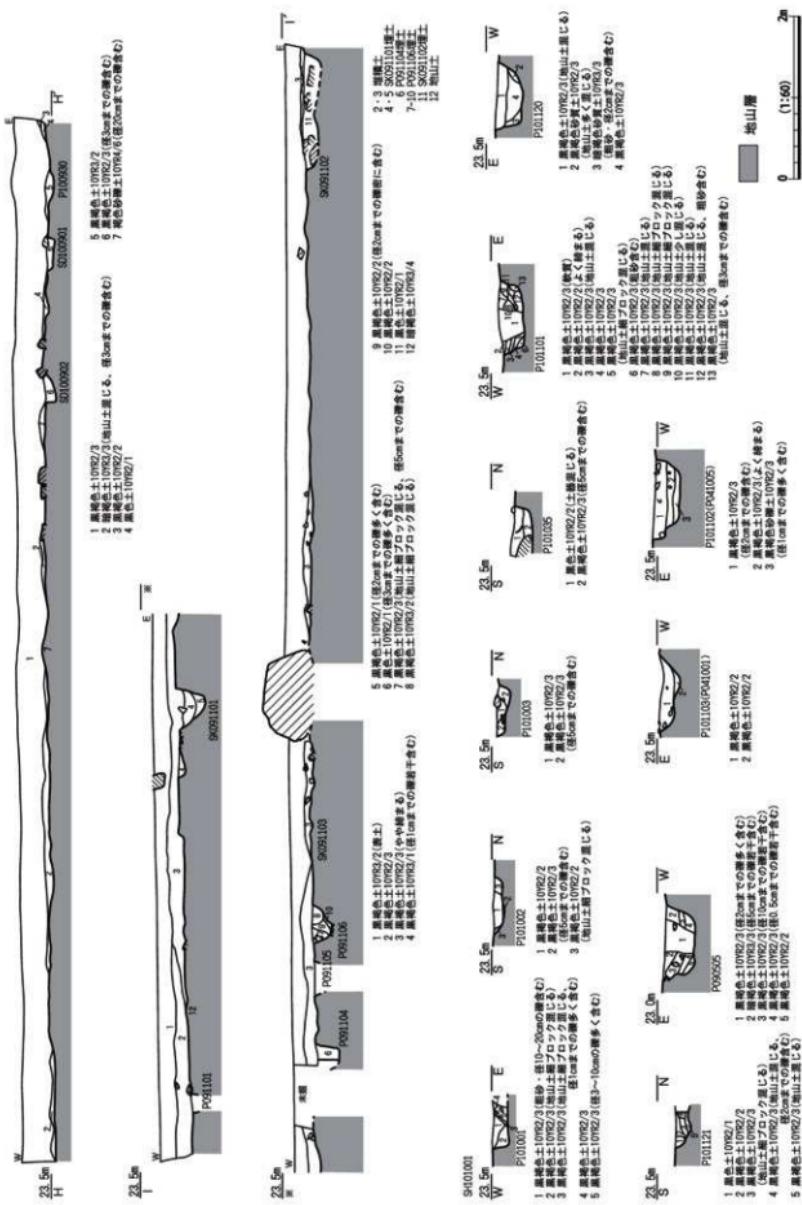
第104図 伽藍北方平面図1 (縮尺1/100)



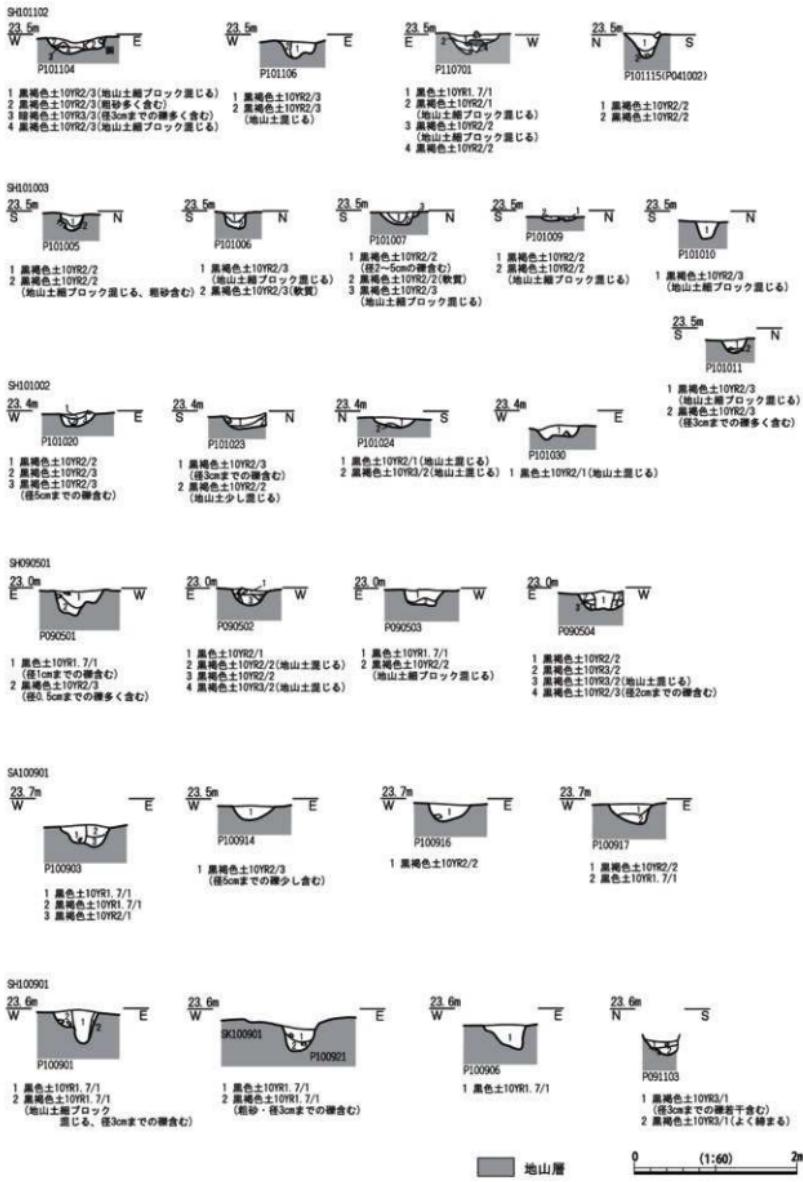
第105図 伽藍北方平面図2 (縮尺1/100)



第106図 仙台北方土層断面図1 (縮尺1/60)



第107図 伽藍北方土層断面図2 (縮尺1/50)



第108図 伽藍北方土層断面図3 (縮尺1/60)

第6項　寺域内の様相

A. 寺域内の調査概要（第104～108回）

近年の各地における古代寺院の発掘調査では、伽藍北方を中心とした周辺地域で雜舍群と考えられる諸施設を検出しており、興道寺廢寺においても同様な施設を検出できる可能性が考えられた。伽藍北方の様相確認を目的として、伽藍域の北限付近から寺域の北限までの南北約50mの範囲において、第4次調査8・10トレンチ、第6次調査7トレンチ、第9次調査5・6・11トレンチ、第10次調査7～11トレンチで調査を行ったところ、複数時期の掘立柱建物跡、柱穴列を検出し、寺院建立以前の集落構造、雜舍群の一端が明らかとなった。

B. 寺域内の建物遺構

講堂基壇から寺域北限付近までの空間には掘立柱建物7棟、柱穴列1基を検出した。古墳時代後期と中世に伴うと考えられる掘立柱建物跡3棟を除いて、寺院存続期に伴う時期のものと考えられる。
（第10次調査10・11トレンチ）

P101001～P101003、P101035、P101101～P101103、P101120、P101121の9基、第9次5トレンチ検出の柱穴1基（P090505）で掘立柱建物跡SH101001（SH090502・SH10101）の一部を構成する。東西4間、南北4間を確認し、東西の柱筋の柱間は東端の柱間で2.1m、その他の3間の柱間で3.0m。南北の柱筋の柱間は北端と南端の柱間で1.8m、中央の2間の柱間で3.0m。柱穴の掘り方はいずれも径が大きく、底面まで深く、断面形状は箱形となる。P101035埋土からTK10型式並行期の須恵器杯（杯H蓋）が出土し、6世紀前半に伴う建物跡と思われる。

P101020、P101023、P101024、P101030の柱穴4基で掘立柱建物跡SH101002の一部を構成する。東西2間、南北1間を確認した。東西の柱筋の柱間は3.3m前後、南北の柱筋の柱間は3.0mである。柱穴の掘り方の径はさほど大きくなり、底面まで浅く、断面形状は箱形となる。建物軸の南北方位から7世紀後葉から8世紀前半に伴う建物跡と思われる。

P101005～P101007、P101009～P101011の柱穴6基で掘立柱建物跡SH101003を構成する。南北2間、東西1間を確認した。南北の柱筋の柱間は1.5～1.8m、東西の柱筋の柱間は2.1m前後である。柱穴の掘り方の径は小さいが、底面までやや深く、断面形状は箱形となる。建物軸の南北方位から中世に伴う建物跡と思われる。

（第10次調査11トレンチ）

P101104、P101106、P101115（P041002）の柱穴3基、第11次調査7トレンチの柱穴1基（P110701）で掘立柱建物跡SH10102（SH110701）の一部を構成する。東西の柱筋の柱間は2.7m前後、南北の柱筋の柱間は不明であるが、2.1mほどと考えられる。柱穴の掘り方はやや小さく、底面まで深くなく、断面形状は箱形となる。柱穴埋土の出土遺物の年代から8世紀後半から9世紀に伴う建物跡と考えられる。

（第9次調査5トレンチ）

P090501～P090504の4基の柱穴で掘立柱建物跡SH090501の一部を構成する。東西2間、南北1間を確認した。東西の柱筋の柱間は1.8m、南北の柱筋の柱間は2.1mである。柱穴の掘り方は全体的に小さいが、底面までやや深く、断面形状は箱形、船底状となる。建物軸の南北方位から7世紀後半から8世紀前半に伴うものと考えられる。

（第10次調査9トレンチ）

P100901、P100906、P100921、P100926の4基の柱穴、第9次調査11トレンチの柱穴1基（P091103）

で掘立柱建物跡 SH100901 の一部を構成する。東西 3 間を確認した。東西の柱筋の柱間は 2.4m、南北の柱筋の柱間は 3.0m 前後である。柱穴の掘り方の径はやや大きく、底面まで深く、断面形状は半円状、凹凸がある半円状である。建物軸の南北方位から 8 世紀後半に伴う建物跡と考えられる。

P100910～P100913 の 4 基の柱穴で掘立柱建物跡 SH100902 の一部を構成する。東西 2 間、南北 1 間を確認した。東西の柱筋の柱間は 2.0m、南北の柱筋の柱間は 2.4m 前後である。柱穴の掘り方は小さいが、底面まで深い。建物軸の南北方位から中世に伴う建物跡と考えられる。

P100903、P100904、P100914、P100917 の 4 基の柱穴が東西に並ぶ柱穴列 SA100902 の一部を構成する。東西 3 間を確認した。東西の柱筋の柱間は 2.6～5.0m と幅があり、柱穴の掘り方の径、深さも不揃いである。7 世紀後半から 8 世紀前半に伴う時期と考えられる。

SD100901、SD100902 とともに L 字状に屈曲する細い溝で、SD100901 の外側に SD100902 が囲むように並んで位置する。2 基の溝で区画施設を構成するものと考えられる。SD100901 は南北最大幅 0.34m、東西最大幅 0.47m、深さ 0.09m、全体的に浅い。SD100902 は南北最大幅 0.36m、東西最大幅 0.57m、深さ 0.12m。幅、深さとともに SD100901 よりも若干規模が大きくなる。

C. 寺域内の様相

寺城内、特に講堂基壇から寺城北限付近にかけては掘立柱建物群が展開することが特徴である。調査面積の制約上、建物跡を全面的に検出するには至らないが、未調査部分を含めて潜在的に建物群が展開していることが想定される。

また、掘立柱建物群に留まらず、土坑、溝、小穴など、多くの遺構を検出している。その一つ一つに対する評価はできないが、一定程度の人の手が寺城の北側に及んでいることは明らかである。

第2節 興道寺廃寺の寺域

第1項 南門基壇と寺域南限の様相

A. 南門基壇と寺域南限の調査概要（第109～113図）

南門基壇の調査に該当する調査箇所は第11次1・11・12トレンチ、第12次調査2～4トレンチ、第13次調査1トレンチである。現地形に基壇状の高まりは見られないが、明治期の小字図を見ると、南門基壇の南に沿って東西方向の小路の存在が確認できる。

寺域南限に関しては、『2007年報告』の中で第1次調査1・3トレンチ検出の溝SD010101・SD010301の付近に位置するものと想定したが、全く根拠がないものであった。第8次調査において中門基壇が良好な状態で確認されたことから南門基壇検出の可能性も高まり、第11次調査では中門基壇の南側で再建期南門基壇の北辺などを検出した。第12次調査では再建期南門基壇の西辺を検出するとともに、再建期の整地面が基壇の南方に広がっている様相を確認したため、第13次調査では整地面の南側への広がりを確認するために調査を行ったところ、寺域外の南方まで広く再建期の整地面が展開している様相を確認した。

B. 南門基壇下層の遺構

南門基壇と西側の整地層の一部を断ち割り、下層を確認したところ、第11次調査1トレンチ、11トレンチで創建期に伴う寺域南限溝の一部である可能性が考えられる南門基壇造営前の2条の東西溝SD111101(SD110103)、SD111102(SD110104)を検出した。

（第11次調査1・11トレンチ）

SD111101(SD110103)、SD111102(SD110104)は地山面から掘り込まれた並行する東西溝で、2条の溝の距離はSD111101北辺とSD111102南辺で約1.6mであり、この溝との間の部分には黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土からなる盛土を小ブロック単位に細かく盛土する。盛土上面の標高は24.2m。溝の埋土がそのまま再建期の整地層となる。SD111101は南北幅2.39m、深さ0.20m。断面形状は浅い箱形である。SD110103の北側の立ち上がりは創建期の盛土によって造る。SD111102は北辺が耕作攪乱で失われるが、南北検出幅1.23m、深さ0.35m。断面形状は船底状。

C. 南門基壇と整地層

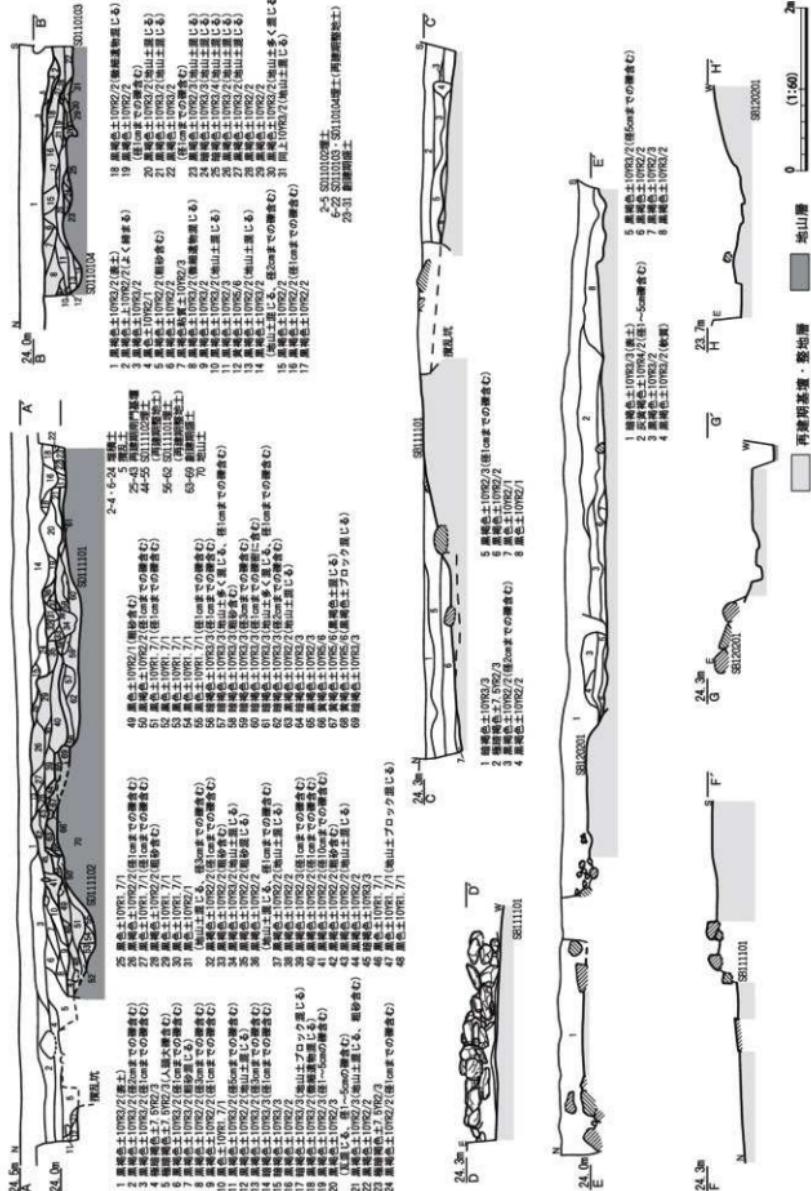
第11次調査11トレンチ、第12次調査2トレンチで南門基壇SB111101(SB120201)を検出した。ただし、南門基壇の造り替えは認められず、この基壇は寺院の再建期に造営された南門基壇ではあるが、南門の再建を示すものではない。これ以外に、第11次調査1・12トレンチで南門基壇西側の整地層、第12次調査4トレンチで基壇南側の整地層を検出し、第13次調査1トレンチで整地層の南への広がりを検出した。

（第11次調査11トレンチ）

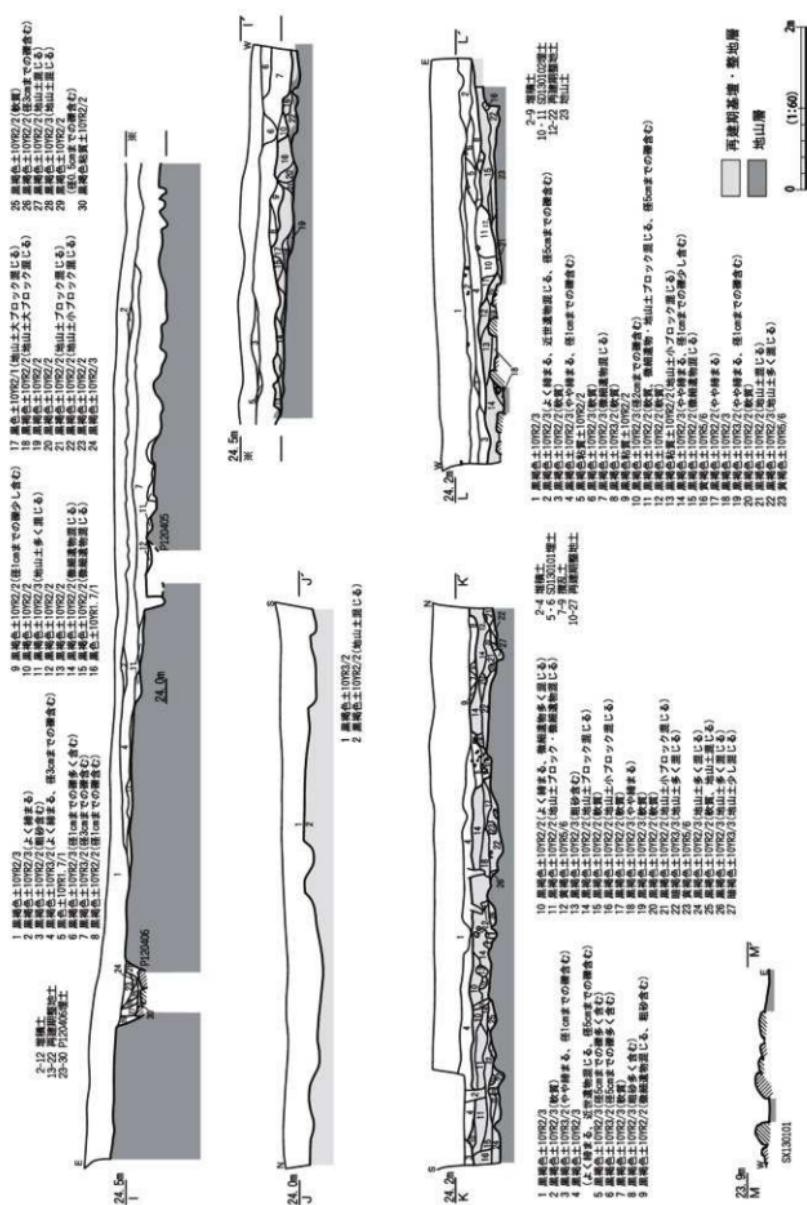
SB111101の基壇積み土は黒色土、黒褐色土、暗褐色土からなり、版築状の縛まりではなく、再建期中門基壇と同様、軟質の土砂を盛土する。SB111101北東隅部から西辺にかけては外装の石積みが残り、北西隅部の石積みがかろうじて3段目まで遺存する。基底石上面は標高24.05m、2段目上面は標高24.15m、3段目上面は標高24.3mの付近にあるが、2段目の石積みは前面に押し出され、逆に3段目の石積みは基壇側に押し返された断面形状を示しており、元位置を保っていない。北西隅部の基底石2石は小ぶりな自然石を用いているが、長辺0.3～0.4m、短辺0.1～0.2mほどと総じて規格的な自



第109図 南門古墳平面図 (縮尺1/100)



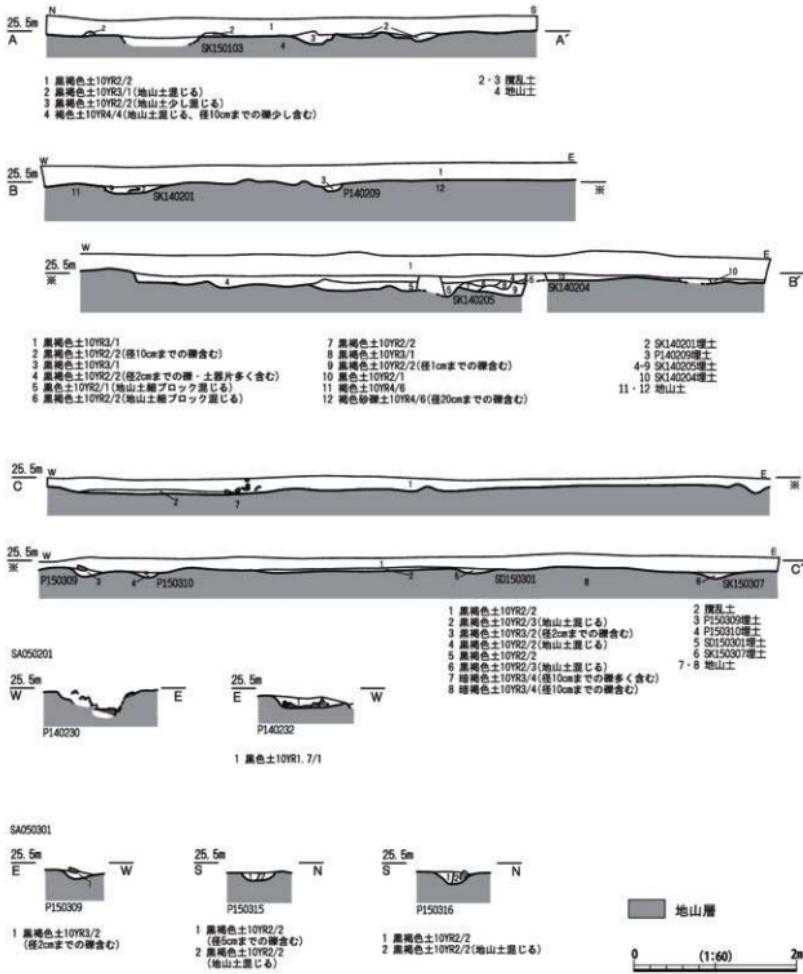
第110図 南門基壇土層断面図1 (縮尺1/60)



第1111図 南門基壇土層断面図2 (縮尺1/60)



第112図 寺域東限平面図 (縮尺1/100)



第113図 寺城東限土層断面図(縮尺1/60)

然石を横位に長手積みする。石材の石種は花崗岩、砂岩が主体を占める。

基壇の南側は大きく削平され、全ての石積みが失われるとともに、南西隅部付近では拳大から人頭大の自然礫が密に混入する搅乱坑を検出した。耕作時に邪魔となった基壇南辺石積みを取り除き、埋めたものか。基壇北辺の石積みが失われた箇所で同様の搅乱坑を検出した。第12次調査2・4トレンチで確認した耕作搅乱の面的な広がりを考えると、基壇に対して一定の改変が加えられていることも理解できる。

SB111101に伴う整地面は基壇の周囲に全体的に広がり、整地面の標高23.9～24.0m前後で、整地面は黒色土、黒褐色土、暗褐色土などからなる。

（第11次調査11・12トレンチ）

南門基壇に整地面から掘り込まれる溝SD110102（SD111201）を検出した。東西に延びる溝で、南北幅2.23m、深さ0.14m。断面形状は弧状。南門の西側に位置し、再建に伴う区画溝として掘削され、短期間で埋め戻されたものと考えられる。

（第12次調査2トレンチ）

SB120201は、第11次調査11トレンチ検出の南門基壇SB111101の西辺にあたる。基壇積み土は黒褐色土からなる。基壇西辺の北側に石積みが遺存するが、改変を受けており、基壇から浮いた状態で標高24.0～24.2mに1列に並ぶ石積みの下に元位置を保つ石積みの基底石が位置している。石積みの基底石上面の標高は23.55m、基底石の直上まで改変の手が入っており、第11次調査11トレンチで確認された基壇北辺石積みの改変と連動している。基壇西辺の南側では石積みそのものが消失し、基壇積み土を残すのみである。

（第12次調査3・4トレンチ）

再建期の整地面を検出した。整地面の標高は3トレンチで23.9m前後、4トレンチで24.0～24.1m前後、整地土は黒褐色土からなる。

（第13次調査1トレンチ）

再建期の整地面を検出した。整地面の標高24.0m前後、西に向かって傾斜し、トレンチ西端での標高23.8mとなる。整地土は黒褐色土からなる。SD130101は蛇行しながら東西方向に延びる溝で、南北最大幅0.77m、深さ0.25m。断面形状は箱形で、西に向かって深くなる。地山土・微細遺物が混じる黒褐色土が小ブロック状に堆積する。SD130102は南北方向に延びる溝で、東西最大幅1.41m、深さ0.22m。断面形状は船底状で、微細遺物、小礫、地山土が混じる黒褐色土を埋土にもち、大ブロック状に堆積する。

集石遺構SX130101は整地層にあり、東西2.1mの範囲に人頭大の自然礫が敷石状に並ぶが、礫の上端を平らに合わせたものではなく、若干のレベル差もある。ただし、礫の下面是地山面に食い込んでおり、礫を据えるための掘り方も未検出である。整地面の南北方向の断割部分の地山面は凹凸が激しく、かつトレンチの位置自体は南門基壇の南にあることから、再建期の盛土地業に伴う整地とも関わり、SX130101は地山面に対して一定の掘削が行われ、また土砂の移動がなされた結果として、地山土ごと礫が集積されたものと考えられる。

D. 南門基壇の様相

寺院創建期の南門基壇付近の様相は不明である。南門基壇の調査に関するいずれのトレンチにおいても再建期の整地層が広く分布するため、地山面に造営されていると思われる創建期段階の遺構が未検出であることにも起因する。断割部分で検出した南門基壇と再建期の整地層の下に潜在する2条の東西溝は創建期の寺城南限に伴う可能性があるが、溝と溝の間に部分的な盛土は認められるものの、溝と溝の間に築地が存在したかについては明らかではない。

再建期の南門基壇の南北軸の方位は座標北から4度西偏し、再建期の金堂基壇、中門基壇に近い方位を示している。標高24.0m前後の高さに整地面が分布し、この上に基壇を盛土で構築する。基壇の規模は東西約7.2m、南北約5.0mの大きさに復元でき、金堂・中門基壇と同様に外装に石積みを伴う。基壇の改変は著しく、基壇北東隅部に3段の石積みを残す程度で、元位置から離れた礎石状の平石が

表土下で検出されている。柱間は不明であるが、金堂に準じて 2.4m としても東西 3 間、南北 2 間の建物が収まるほどの基壇規模である。

第 2 項 寺域東限の様相

A. 寺域東限の調査概要（第 101～103 図）

寺域東限に関しては、これまで段丘崖に沿う位置での存在が考えられてきた。興道寺廃寺が所在するあたりの段丘崖の一部には急な法面がみられるが、これは後世の削平に伴うものである。もともと本来は東に向かって緩やかに傾斜していたものと考えられ、その緩斜面の地形が寺域の北側に一部が現存している。寺域東限を画する施設の検出を目的として、第 14 次調査 1 トレンチ、第 15 次調査 1～3 トレンチで調査を行っている。

B. 寺域東限の遺構

掘立柱建物跡 1 棟と柱穴列 3 基を検出した。

（第 14 次調査 1 トレンチ）

P140101～P140105 の 5 基の柱穴で掘立柱建物跡 SH140101 の一部を構成する。東西 1 間、南北 2 間を確認した。東西の柱筋の柱間 3.4m、南北の柱筋の柱間 1.8m 前後である。柱穴の掘り方は平面形態が梢円形で、底面まではさほど深くない。周辺遺構の出土遺物の年代観から 7 世紀前半に伴うものと考えられる。

（第 15 次調査 2・3 トレンチ）

P150230・P150232 の 2 基の柱穴で柱穴列 SA150201 の一部を構成する。P150230 は底面に礎石をもち、P150232 は埋土に根固め石が含まれる。柱筋の柱間は 2.6m 前後、柱穴の掘り方の径はやや大きいが、底面まで絶じて浅い。古墳時代後期に伴う遺構と考えられる。

P150309・P150315・P150316 の 3 基の柱穴で柱穴列 SA150301 の一部を構成する。柱筋の柱間は 2.0m 前後、柱穴の掘り方の径は小さく、底面まで浅い。

C. 伽藍東限を画する施設の様相

寺域東限を画する施設そのものは未検出である。第 10 次調査 2・3 トレンチの中央付近で確認された地表面の標高が最も高くなるところに寺域東限を画する何らかの施設があったものと考えられる。ここから寺域内の西側と寺域外の東側に向かって地表面の標高が徐々に低くなっていくことから、地表面の標高の最高位に寺域東限があったものと想定しておきたい。

第 3 項 寺域北限・西限の様相

A. 寺域北限・西限の概要（第 114～117 図）

寺域北限については、地表面の微地形の観察によって伽藍域の北方に一段、標高が低くなる東西のラインが存在することが第 11 次調査の着手前に把握された。この地形変換点付近で第 11 次調査 7 トレンチの調査を行ったところ、この地形変換の東西ラインのすぐ南側で東西に延びる溝を検出した。このため、第 12・13 次調査においてはこの溝の東への伸張を確認し、寺域北限の様相を確認するため、第 12 次調査 9 トレンチ、第 13 次調査 4～6 トレンチを順次設定して調査を行い、この東西溝が一定の長さをもつことが判明した。

この東西溝は寺域北限に関わる可能性が高まったことから、その後の調査でさらに追及するため、

第14次調査2・3トレンチ、第15次調査4・5トレンチ、第16次調査2トレンチの調査を行った。

寺城西限に関しては、全く調査が及んでいないこともあり、第2期調査まで実態が不明であった。寺城が所在する畠地の西側には、明治期には存在していた南北道路、水路、そして水田があり、道路と水路を境として東側の畠地と西側の水田との間に大きな比高差があることから、現在の土地利用のあり方を手掛かりに道路付近に寺城西限が所在するものと想定されてきた。

日常生活で使用されている道路や水路の下を学術目的で調査することは困難であるため、道路横の水路の西側、後に盛土造成された箇所において第14次調査5・6トレンチ、第16次調査3トレンチの調査を行った。

B. 寺域北限・西限の遺構

寺城北限に関する遺構として、第11次調査7トレンチ・第12次調査9トレンチ、第13次調査4・6トレンチ、第15次調査4・5トレンチ、第16次調査2トレンチで、一連の東西溝 SD110701 (SD120901・SD130401・SD130501・SD130601・SD150401・SD150501・SD160201) を検出した。また、第14次調査3トレンチで竪穴建物跡 SB140301 を、第15次調査5トレンチでは整地層を伴う竪穴建物跡 SB150501 を、それぞれ検出した。

寺城西限に関しては、かつて福井県農事試験場があったところの造成層の下に水田の旧表土がかろうじて残り、その下で地山面を検出した。また、道路のすぐ東側にあたる第16次調査2トレンチで南北溝 SD160202 を検出した。

(第11次調査7トレンチ)

SD110701 は南北最大幅 1.98m、深さ 0.27m。拳大から人頭大ほどの大きさの自然礫が底面から浮いた状態で分布する。なお、溝北側の地山面においては地山層の包含礫の露頭が目立つ傾向があるが、反対側の溝の南側の地山面では粘土質であり、地山面に対する一定の地業があった可能性が考えられる。その傾向はこのトレンチの東側、第12次調査9トレンチ、第13次調査4トレンチにおいても同様である。

SD110701 北側の地山面の落ち込みは、東側の第12次調査9トレンチまで延びる。地山面の落ち込みは第11次調査8・9トレンチ検出の地山面の落ち込みラインと直線的につなぐと、現在の地表面の微地形で確認できる地形変換の東西線と位置的には概ね重複する。この北側の落ち込みを東西につなぐ線は寺院創建期の南北方位とほぼ直交する方位である。

(第12次調査9トレンチ)

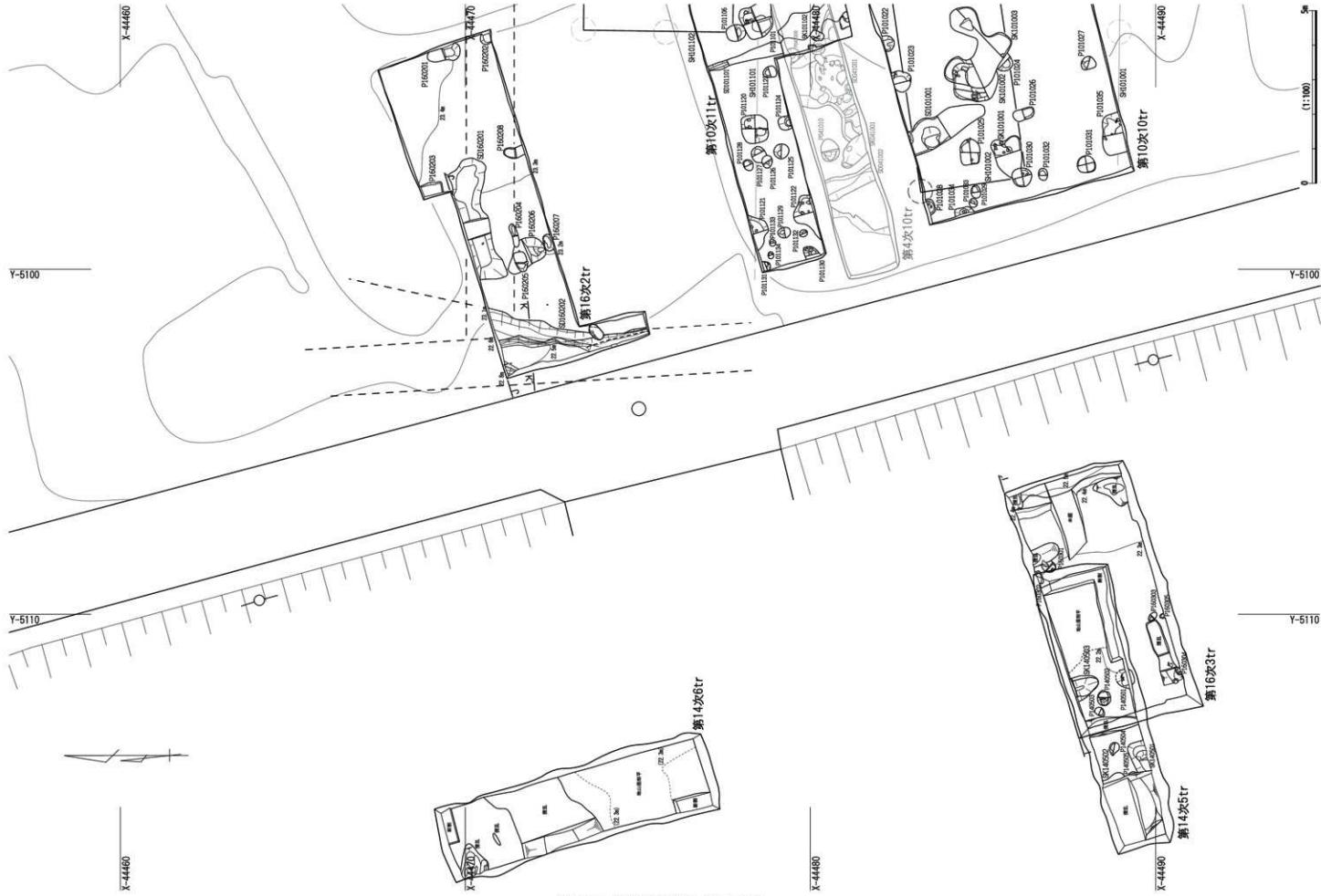
SD120901 は南北最大幅 1.97m、深さ 0.18m。底面は地山層の包含礫の露頭が部分的に見られる。拳大ほどの大きさの自然礫が底面から浮いた状態で多く分布する。

(第11次調査8・9トレンチ)

北に向けて、標高 23.4mまで地山面の標高が低下する落ち込みが確認されている。

(第13次調査4・5トレンチ)

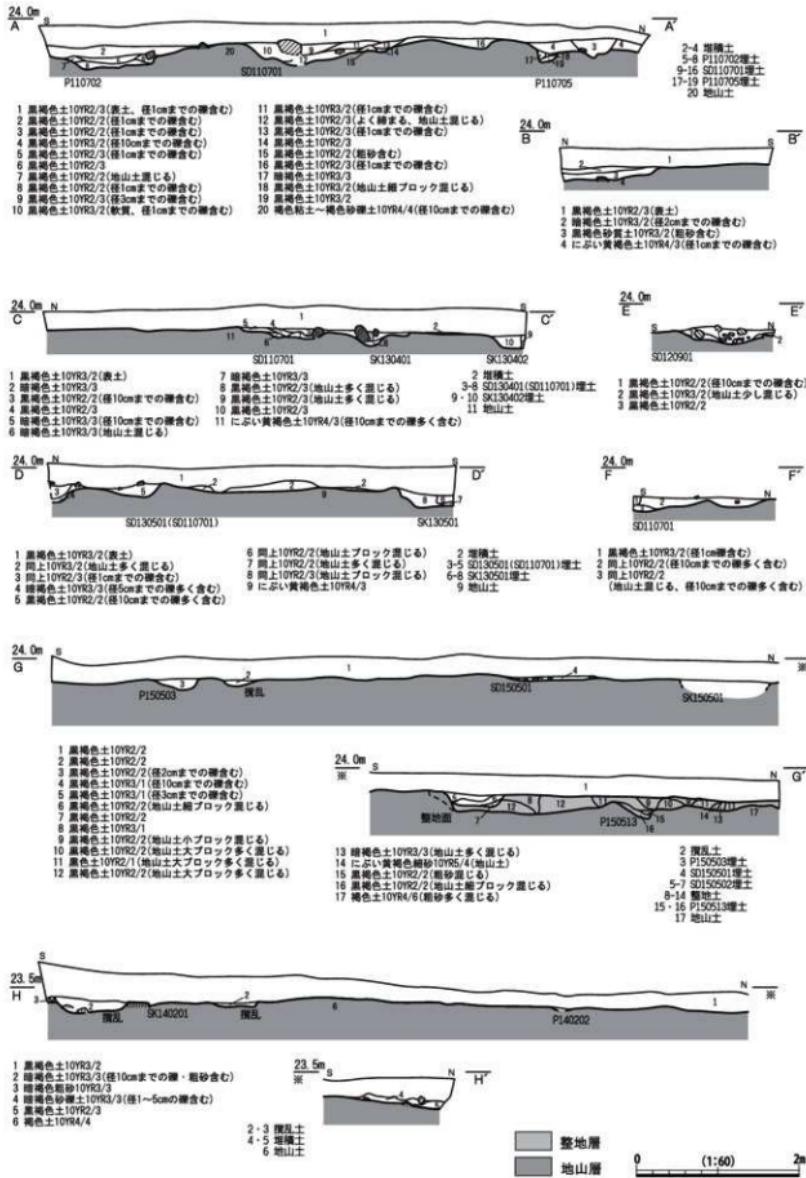
SD130401 は南北最大幅 2.60m、深さ 0.23m。底面は地山層の包含礫の露頭が部分的に見られる。拳大ほどの大きさの自然礫が底面から浮いた状態で多く分布する。SD130501 は南北幅 1.24m、深さ 0.23m。拳大ほどの大きさの自然礫が底面から浮いた状態で分布する。



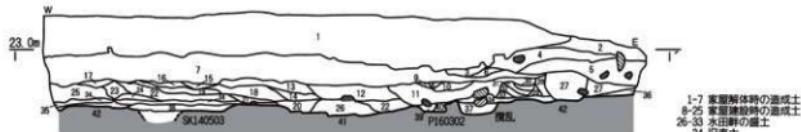
第 114 図 寺域北限平面図 1 (縮尺 1/100)



第115図 寺域北限平面图2 (縮尺1:100)

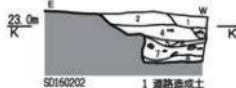


第116図 寺域北限土層断面図1（縮尺1/60）



- 1 黄褐色砂質土10YR5/6(人頭大的混合む)
- 2 に深い黄褐色土10YR4/3(径3cmまでの複多く含む)
- 3 黑褐色土10YR3/2(径1cmまでの複多く含む)
- 4 黑褐色土10YR3/2(径1cmまでの複少し含む)
- 5 明黄褐色土10YR6/6(径2cmまでの複多く含む)
- 6 黑褐色土10YR3/1(よく純まる)
- 7 暗褐色土10YR3/3(ゴミ含む、部分的に径3cm程の複多く含む)
- 8 暗褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 9 暗褐色土10YR2/2(地山土混じる)
- 10 枯れ砂礫土 5YR6/6
- 11 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 12 黑褐色土10YR2/2(径1cmまでの複含む)
- 13 黑褐色土10YR3/2(径1cmまでの複含む)
- 14 黑褐色土10YR3/2(径1cmまでの複含む)
- 15 黑褐色土10YR3/2(径1cmまでの複含む)
- 16 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる、径1cmまでの複含む)
- 17 暗褐色土10YR3/3(地山土混じる)
- 18 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 19 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 20 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 21 暗褐色土10YR3/2(地山土混じる)

- 1-7 東面解体時の造成土
- 8-25 本斜面解体時の造成土
- 26-33 水田耕の遺土
- 34-35 田植土
- 36 稲草土
- 39-40 P160302埋土
- 41-42 地山土



- 1 道路底造土
- 2-6 SD160202埋土
- 1 黑褐色土10YR2/2(径5cmまでの複合む)
- 2 黑褐色土10YR2/3(径10cmまでの複合む)
- 3 黑褐色土10YR2/3(地山土混じる)
- 4 黑褐色土10YR2/2(径10cmまでの複合む)
- 5 黑褐色土10YR2/3(径10cmまでの複合む)
- 6 黑褐色土10YR3/4
- 7 黑褐色土10YR3/2(径20cmまでの複多く含む、地山土混じる)
- 8 黑褐色粘質土10YR3/2



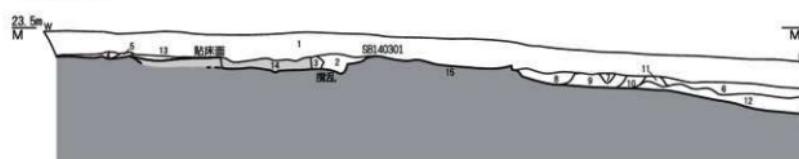
- 1 黑褐色土10YR2/1
- 2 黑褐色土10YR2/2
- 3 黑褐色土10YR2/2
- 4 黑褐色土10YR2/2(径5cmまでの複合む)
- 5 黑褐色土10YR2/2
- 6 黑褐色土10YR2/3
- 7 黑褐色土10YR2/3
- 8 黑褐色土10YR2/3(地山土混じる)
- 9 黑褐色土10YR2/2(径5cmまでの複合む)
- 10 黑褐色土10YR2/3(径3cmまでの複合む)
- 11 黑褐色土10YR3/2
- 12 黑褐色土10YR3/2(径20cmまでの複多く含む、地山土混じる)
- 13 黑褐色土10YR2/2
- 14 黑褐色粘質土10YR2/2
- 15 黑褐色土10YR2/2(径10cmまでの複合む)

- 1-2 道路底造土
- 3 精土
- 4-5 漆喰底造土
- 6-14 SD160201埋土
- 15 SD160201地山土



- 1 黑褐色土10YR2/3(表土)
- 2 黑褐色土10YR2/2
- 3 黑褐色土10YR2/2(地山土小ブロック混じる、径5cmまでの複合む)
- 4 黑褐色土10YR3/2
- 5 黑褐色土10YR3/2(地山土小ブロック多く混じる)
- 6 黑褐色土10YR2/2
- 7 黑褐色土10YR2/2(地山土多く混じる、径1cmまでの複合む)
- 8 黑褐色土10YR2/2(径5cmまでの複合む)
- 9 黑褐色土10YR3/2
- 10 黑褐色土10YR3/2(径1cm複合む)
- 11 黑褐色土10YR2/2(地山土混じる)
- 12 黑褐色土10YR2/2(地山土混じる、径10cmまでの複多く含む)

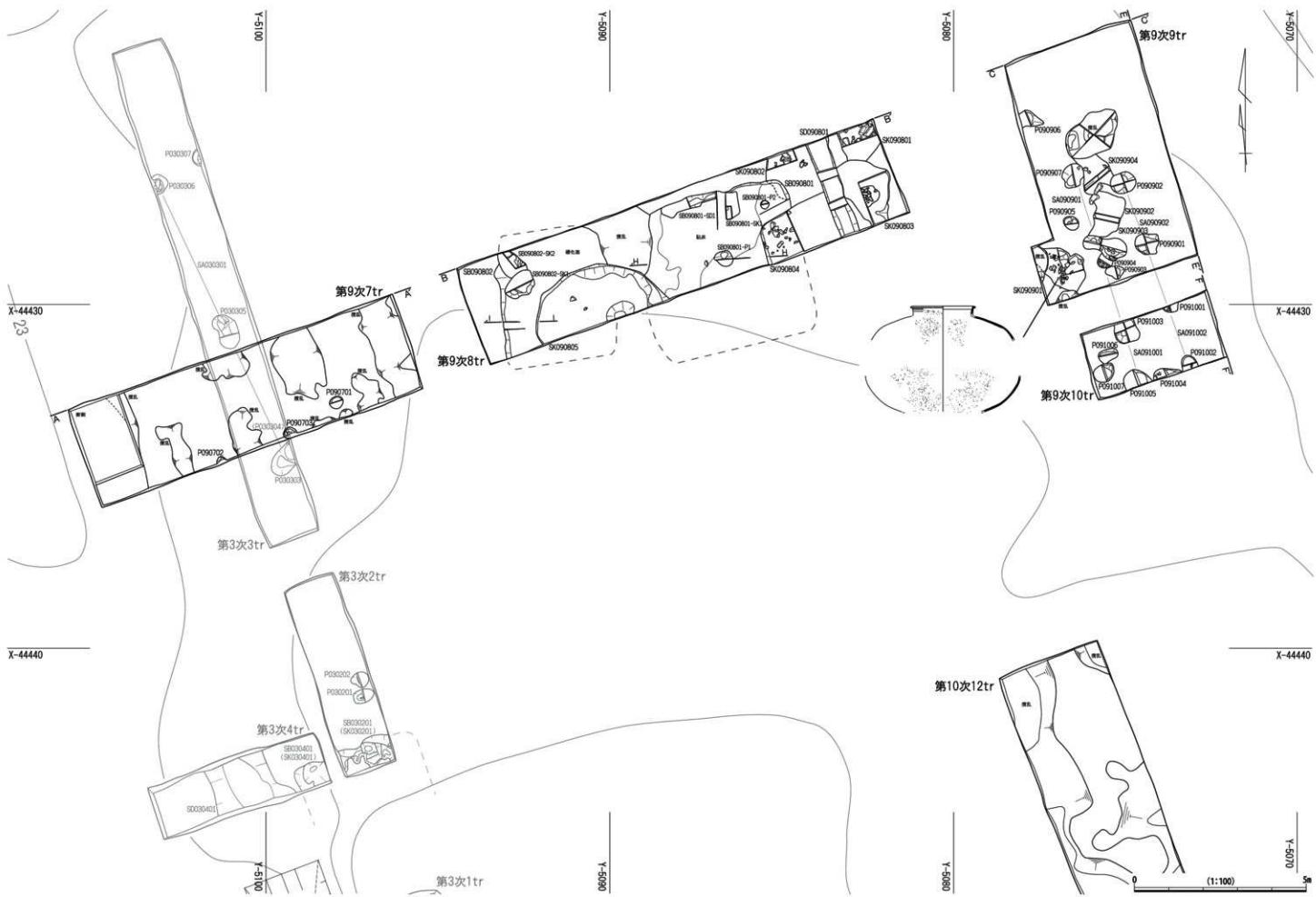
- 2-5 塵土
- 6-9 P120901埋土
- 10-12 SD120901埋土



- 1 暗褐色土10YR3/3
- 2 黑褐色土10YR2/2(径5cmまでの複合む)
- 3 黑褐色土10YR4/4(地山土ブロック)
- 4 黑褐色土10YR3/2(細砂混じる)
- 5 黑褐色土10YR2/2(地山土小ブロック混じる)
- 6 黑褐色土10YR2/2
- 7 黑褐色土10YR3/2
- 8 暗褐色土10YR3/3(地山土多く混じる)
- 9 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 10 黑褐色土10YR2/2
- 11 黑褐色土10YR3/2(地山土混じる)
- 12 黑褐色土10YR1/2(地山土小ブロック)
- 13 黑褐色土10YR2/2(地山土混じる)
- 14 黑褐色土10YR2/2(地山土混じる)
- 15 黑褐色土10YR4/4
- 16 黑褐色土10YR4/4

- 2-5 塵土
- 6-12 塵土
- 13 SBL40301埋土
- 14 SBL40301地山土
- 15 地山土

第117図 寺城北限土層断面図2 (縮尺1/60)



第118図 寺域外北方平面図1 (縮尺1/100)



第119圖 寺城外北方平面圖2 (縮尺1:100)

（第14次調査3トレンチ）

SB140301の平面形態は方形を呈し、床面の標高は約23.1m前後、やや中央寄りに黄褐色土からなる貼床が見られ、よく締まっている。出土遺物の年代から堅穴建物跡SB140301は8世紀前半に伴う時期と考えられる。

（第15次調査4トレンチ）

SD150401は南北最大幅1.57m、深さ0.14m。埋土には拳大から人頭大ほどの自然礫が含まれる。

（第15次調査5トレンチ）

整地面は、地山面を0.15～0.2mほど掘削して掘り下げ、その部分に黒色系の土砂を埋める。整地に伴う掘り方は整地面の南端付近が深さ0.2m、標高23.45mと最も深く、北側に向かって地山面の標高が23.5mまで高くなり、整地面の掘り方も浅くなる傾向がある。整地土は黒褐色土を基本とし、黒色土、暗褐色土を用いて、ある程度大きなブロック状の土砂を埋めている。整地面の上面から堅穴建物跡1棟(SB150501)、溝1条(SD150502)、土坑1基(SK150502)が掘り込まれており、これらの年代観は7世紀以後であるので、その整地はそれ以前にさかのぼるものと思われる。

SB150501は整地面を掘り込むもので、堅穴建物の北西隅部にあたる。平面形態は方形を呈し、中央寄りに褐色粘土を叩き締めた床面をもち、床面の標高は約23.55m。建物跡の南縁に焼土面が広がる。床面に貼床をもっている状況から6世紀までさかのぼると考えにくく、また床面検出の小穴出土土器の年代から7世紀前半の建物跡と考えられる。

SD150501は東西に延びる。南北最大幅1.10m、深さ0.12m。埋土に拳大ほどの自然礫が含まれる。

（第16次調査2トレンチ）

SD160201は南北最大幅0.86m、深さ0.12m。SD160202は東西最大幅1.40m、深さ0.33m。断面形状は緩やかな弧状に深くなり、さらに箱型に一段深くなる。

（第16次調査3トレンチ）

トレンチ東端では標高22.3～22.55m付近で地山面の上面へと至る。地山面は西に向かって傾斜したものと考えられるが、水田造成に伴って地山面の若干の削平があったものと考えられる。

C. 寺域北限・西限の様相

『2012年報告』で示した寺域北限に伴うと考えられる東西溝が段丘面を東西に横断する形で延び、第15次調査5トレンチのあたりを最高位とする様相を確認した。溝そのものは底面まで浅いことを考えると、一定の削平を受けているものと考えられ、溝の北側に所在する堅穴建物跡2棟の壁面がほとんど失われている状況を考えると、寺域北限付近では全体的な造構面の削平がうかがえる。

SD160202は興道寺廃寺では初めて確認された寺域西限に伴うと考えられる南北溝で、幅1.0m以上で一定の深さもあり、興道寺廃寺ではSD060601(SD130201)の他にあまり見られない本格的な溝であるとともに、2時期の溝が方位を違えて上下に重複している可能性も留めていることから、長期間に及ぶ溝であった可能性が高い。この溝の検出面が標高23.2mほどで、第16次調査3トレンチでの地山面の標高の最高位が22.4mであることから、道路・水路下に存在するものと考えられる地山面の比高差は大きく、地山面の段差の構造は不明であるが、寺域西限を画する施設が潜在している可能性が高い。その場合、SD160202は寺域西限を画する施設の内側に位置する南北の基幹水路であるものと考えられる。

東西溝の北側で2棟の堅穴建物跡を検出した。寺域北限付近から寺域外北方にかけて分布する古墳時代後期から律令期の堅穴建物群の一部を構成しているものと考えられる。

第3節 興道寺廃寺の寺域外

第1項 寺域外北方の様相

A. 寺域外北方の概要（第120～122図）

寺域外、特に北方の様相については、開発行為に伴う記録保存の調査として興道寺廃寺の北方で6世紀から9世紀までの遺構、遺物が断続的に検出されており、興道寺廃寺に伴う諸施設、集落などが展開する可能性が予見された。このため、興道寺廃寺の北方の様相を確認するために第9次調査7～10トレンチ、第14次調査4トレンチ、第15次調査5トレンチの調査を行ったところ、古墳時代後期から古代にかけての堅穴建物跡、掘立柱建物跡などを検出し、興道寺廃寺の周辺では寺域外にも関連遺構が分布することが再確認された。

B. 寺域外北方の遺構

第9次調査3トレンチで堅穴建物跡SB090301、SB090302の2棟を検出した。また、第3次調査3トレンチ、第9次調査9・10トレンチで柱穴列SA030301、SA090901(SA091001)、SA090902(SA091002)の3基を検出している。

〈第3次調査3トレンチ〉

P030303、P030305、P030306の3基の柱穴で柱穴列SA030301を構成する。南北の柱筋の柱間は4.5m前後、柱穴の掘り方の径はやや大きく、底面まで一定の深さがある。6世紀後半から7世紀前半に伴う時期と考えられる。

〈第9次調査8トレンチ〉

SB090801の平面形態は隅丸方形で、一辺4mほどの方形プランをもつものと考えられる。床面はほぼ全体に厚さ数cmの褐色粘土を叩き締めた貼床面が認められる。建物北辺は構を部分的に廻らせ、東側に土坑1基をもつ。建物軸の南北方向から寺院創建期に近い時期に伴うものと考えられるが、建物が切られるSK090805の埋土に8世紀前半の土器が含まれることから、建物の時期として8世紀前後が考えられる。

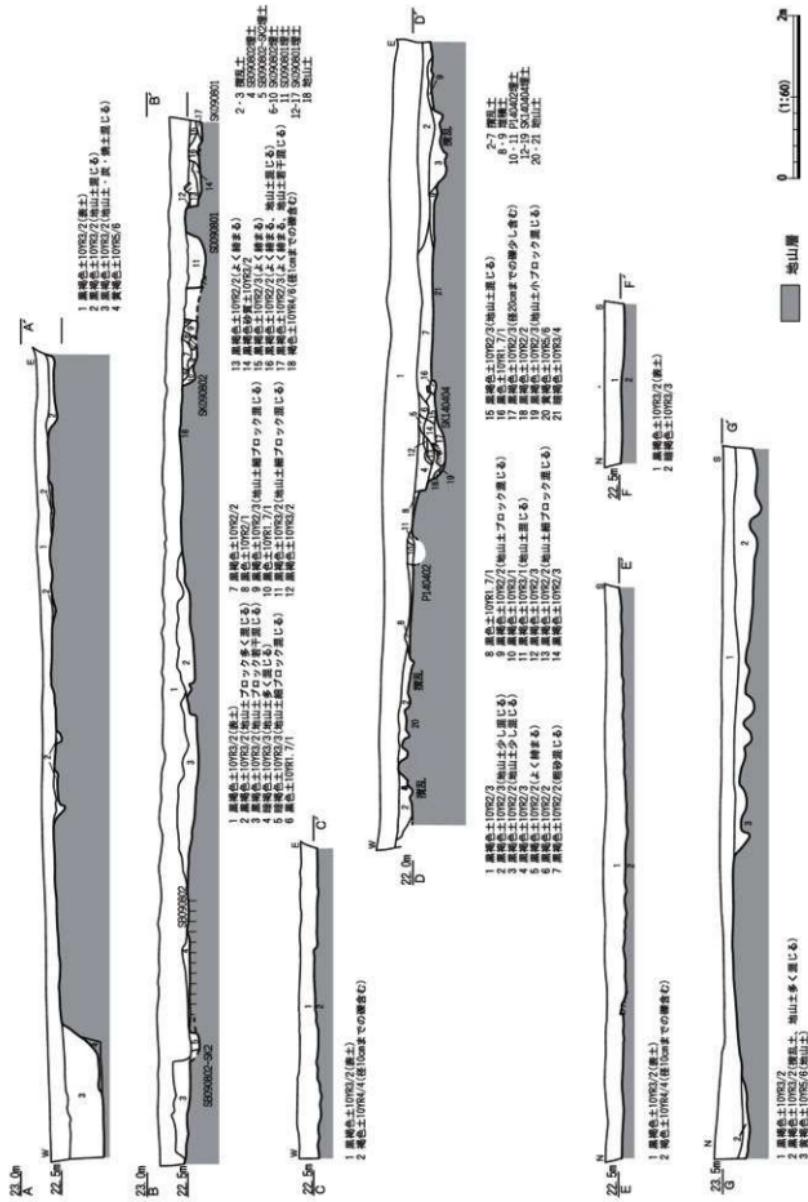
SB090802はSB090801の西側に、建物軸の南北方向をほぼ合わせて並列する。平面形態は隅丸方形で、一辺3m強ほどの正方形、もしくは南北に若干長い長方形の規模をもつものと思われる。床面に明瞭な貼り床は見られず、地山面をそのまま床面としており、床面全体が強く硬化する。建物北西隅部にカマド、地床炉の一部と考えられる土坑2基をもつ。

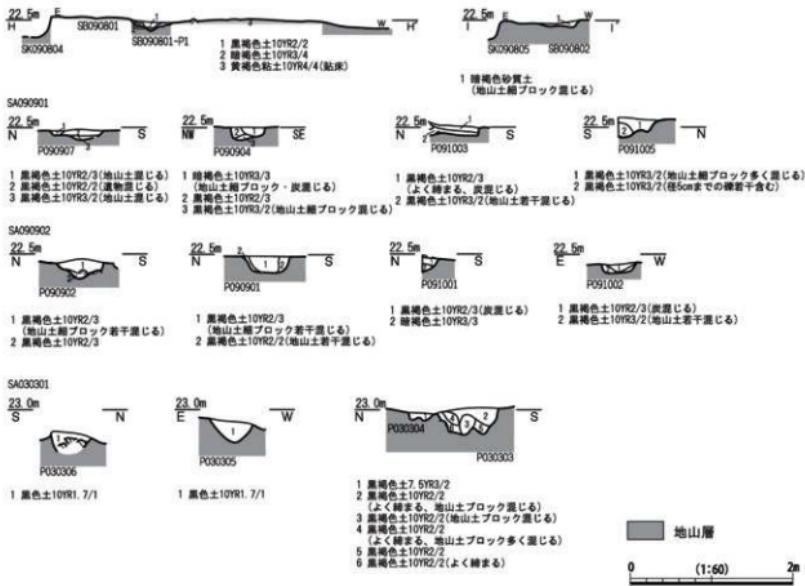
〈第9次調査9・10トレンチ〉

P090904、P090907、P091003、P091005の4基の柱穴で柱穴列SA091001を構成する。南北の柱筋の柱間は2.1m前後、柱穴の掘り方の径はやや大きいが、底面まで総じて浅い。P090901、P090902、P091001、P091002の4基の柱穴で柱穴列SA091002を構成する。南北の柱筋の柱間は1.8m前後、柱穴の掘り方の径はやや大きく、底面まで一定の深さがある。柱穴の埋土から出土した遺物の年代から、ともに6世紀後半から7世紀前半に伴う時期と考えられる。

C. 寺域外北方の様相

寺域外北方には、6世紀後半から8世紀にかけての堅穴建物跡、柱穴列が展開している。さらに北方では福井県埋蔵文化財調査センターによる農道敷設工事に伴う発掘調査が行われており、堅穴建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟を検出しており、堅穴建物跡を含む集落が展開している様相を確認した。





第121図 寺域外北方土層断面図2 (縮尺1/60)